

あこら

169号

公開講座〈自立の心理学〉

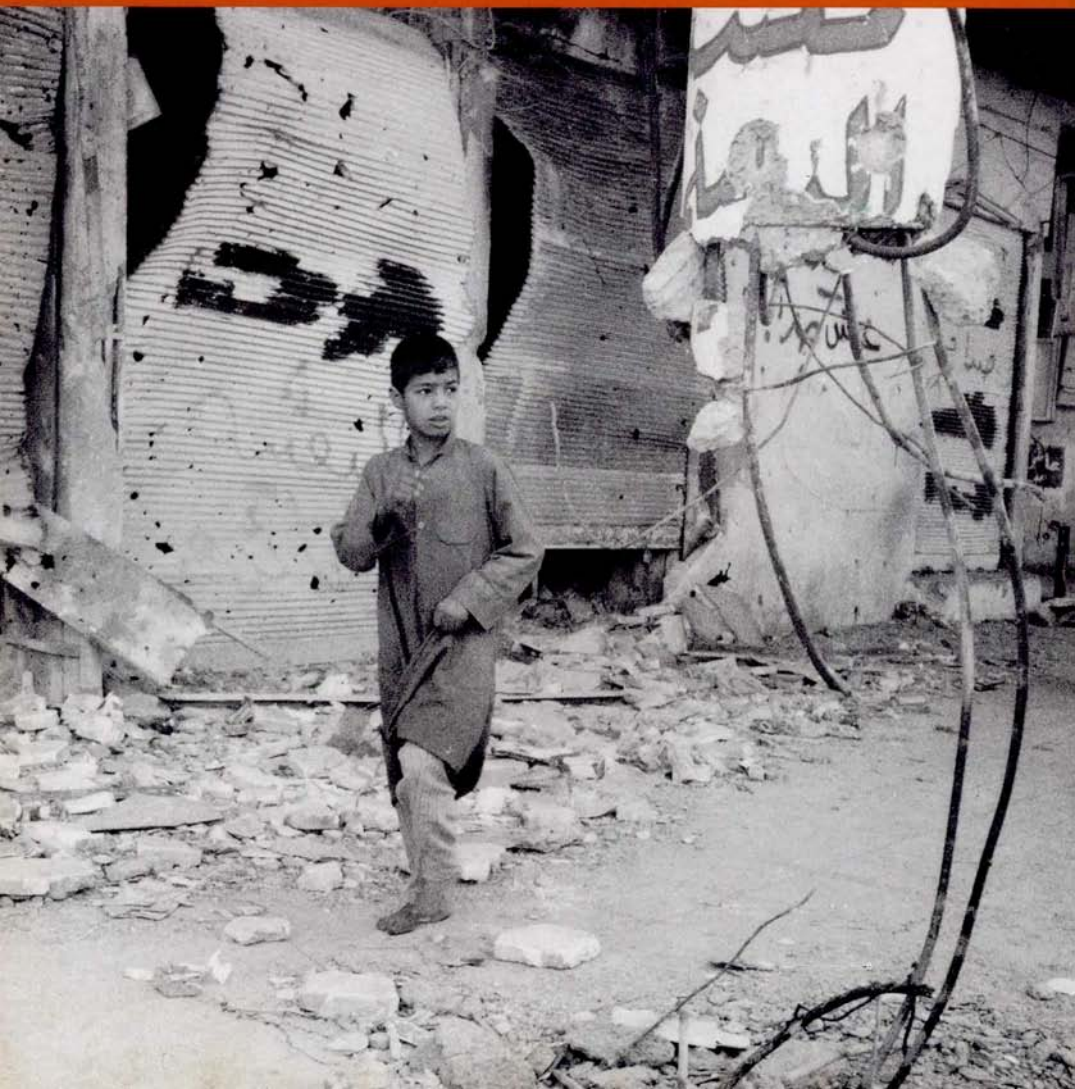
# 「湾岸戦争から未来へ」

女たちが語る世界新秩序——

体験——

パレスチナキャンプで 田宮友恵

今月の編集は あこら〈自立の心理学教室〉



# 目次

湾岸戦争から未来へ 公開講座〈自立の心理学教室〉	1
体験——パレスチナキャンプで 田宮友恵	63
サツ回り記者の現状 吉野理佳	87
あごら読書室	89
PKO法案をめぐる緊急報告 堂本暁子	90
北から南から	96

表紙	写真	内戦の跡	(イラク南部の都市、ナジャフで)
絵	怖かった!	(スジャー・ジャーシム・ムハンマド)	

公開講座〈自立の心理学教室〉

# 湾岸戦争から未来へ

——女たちが語る世界新秩序

報告者 斎藤千代 田宮友恵 辻 美幸 長島治美

ゲスト 田中好子 ナフィサ・ミナイ バーバラ・イエーツ

司 会 しま ようこ 岸野美奈子



自分を見つめながら自分と社会とのかかわりを考えていく〈自立の心理学〉が、五月十九日、初めて公開教室を開きました。テーマは「女たちが語る世界新秩序——湾岸戦争から未来へ」。湾岸戦争の間じゅう、毎回この戦争についてのやりきれない思いを話し合っていたことから生まれた試みでした。どこかの国の主導で着々とつくられようとしている「新秩序」。それに盲従するだけの日本政府。それを評論し、傍観するだけでなく、では自分はどう考え、何をするか、できれば主体的に「私たちの新秩序」も模索したい。——日曜の朝から夕方五時まで、わずかな昼休みをとっただけで、数名の男性もまじえて話しこみました。午前中は三月に戦後のイラクを訪れた四人の女性（斎藤、田宮、辻、長島）のスライドを上映しながらの報告、そして午後は出席者全員（約五十名）による討論。——その午後の部をご紹介します。半年も前の記録ですが、PKOが声高に叫ばれる今に通じる討論だったように思われますので。

## 自分たちの見方だけが

### ただしいのか

しま 湾岸戦争をめぐる情報操作の中で、今日の午前中の臨場感のあるお話を感銘しながら聞きつつも「これが正しいので、西側情報は、誤りだ」っていうふう  
に正・誤で二分して考えたら、これもおかしいと思うんですね。これから湾岸戦争への思いを、いろいろ話し合い、それをとおして、私たちが未来をどんなふう  
に引き受けていけるのか、情報操作の中で、自分で判断して生きることに勇気が持てるか、と思うのです。  
そして、私たちは世界に向けて発信源になっているというつもりで、話し合いをしようではありませんか。  
私と岸野さんの二人で、司会というよりも、必要な時にすすめ役になるだけで、皆さんと一緒に言いたいことを発言したいと思っています。よろしくお願いします。じゃあ、そんなことで、今日の午前中の話を引

き継ぎながら、まず言いたいことを言いたいとおっしゃる方に、マイクをおまわししますので、おしゃって下さい。

女A ちょっと確かめたいんですが、私なんかはニュースで見て、情報なんかマユツバだな、と思いながら、反乱というのは可能性があるんじゃないかと思つてたので伺います。イラクで反乱が起きるような状況は全くなかったのか、それともそういう状況があつて、ああいうふうにご利用されてしまったのか、お聞きしたいと思います。

田宮 カルバラとナジャフというのは、反乱の後なんです。ただその反乱というのは、イラクの中で起こつた反乱なのか、それともアメリカにそそのかされて、たとえばベルシャ人、イラン人がやったとか、サウジアラビア人が、トルコがやった、という情報もいろいろあつたんですね。で、私自身も、バクダッドで、アメリカのテレビ会社が生じた報道で、ナジャフかカルバラで自分の息子とか家族を殺された女の人が、「あ

これはペルシャがやったんだ、ペルシャがやったんだ」と泣き叫んでいるのを見ましたし、内戦は確かにあったんだと思います。ただ、それがどういうふうに起こったかについての新聞情報っていうのはマユツバだと思っています。

辻 バクダットに関しては、前の日に「内戦があつて非常事態宣言発令があつて」という記事が出たので、心配しながら入ってみて、アレツと思つたんですけど、もしかしてバクダッドの一部でそういう反乱があつたのかも知れませんか、で、私たちが行く前に、もうおさまつてしまったのかもしれないし、そのところ私たちも全部まわったわけじゃないのでわからないんですけれども。

斎藤 反フセインというのはあつたと思います。ただ反政府勢力やフセインをどう評価するかというのはすごく難しい問題ですね。フセインが強権政治をとっていることは、間違いないんですけど、強権政治をとらざるを得ない背景がありまして、フセインに好意的で

ない人も、「彼は拡張主義ではない」ということを言つてました。「外に向かつて拡張する体制では全くない」って。「フセインをやめさせれば、経済制裁を解く」ってあれだけ言われながら、なおイラクがフセイン体制を守ろうとしているのは、彼がいなくなるとまとめる人がいなくなるということのようです。内発的な理由ではフセイン体制は崩壊しない、というのが私が聞いたかぎりでは一般的な意見でした。外圧として出てきた時はいわゆる多国籍の国々がコントロールしやすい政府ができる、それはもっと大変なことになる、という認識があるみたいです。

もともと、イラクの中にシリア派がたくさんいるのはご存じのことと思います。多少の宗派の違いはあつても比較的共存していたのですが、イラン・イラク戦争の端緒になったイスラーム革命以後、シリア派の中の過激派が、イスラーム革命に沿った宗教改革みたいなものを行おうと、内乱を起こしたわけです。スライドの説明で、バルキッサドルという人が刑死したと申

しましたが、フセインは、そういう反乱に対しては実に徹底的に強圧で押さえたみたいです。したがって内乱の火種は常にあつたろうと思いますが、あれほどの内乱になったのは、何かの援助があつたのでは……と、現地を訪れて感じました。

クルド族も融和関係にあつたけれども、イラン・イラク戦争の後半になって（「イランが後援した」というふうにイラクの人は言ってるんですが）、反乱があつて、それ以来クルド族に対してやや強権的な立場になったそうです。ここにも内乱の火種はあつたと思います。

ただクルド族のことも、今の新聞やテレビに出ている話では、全くイラクだけがクルド族を抑圧してるみたいに言われてますけど、たとえば、トルコは、クルド族というのは人口の中に全くカウントしてないんですね。今度もクルド族が逃げて行った時に、国境でトルコ兵が銃やこん棒をふるって抑圧しているところをテレビで放映されましたけれども、イラクでは、公用

語の中にクルド語を入れてますし、自治も考えようとしてたわけです。

基本的にはイラクは社会主義国で、東欧の諸国が経済破綻を起こしたと同じようにイラクも経済破綻を起こして、国内の改革をしないとならないというので、八月のクウェート侵攻の前に、革命評議会をやめて民衆の議会を作るとか、いろんな公約をフセインはやっています。それをやらざるを得ないような状況に落ち込んでいた、経済的にこっちもさっちもいかなかったという背景はあるみたいです。だから、国の外まで出るなんていう余力は全くなかった。

クウェートの問題は、クウェートの建国によってペルシャ湾の出口をふさがれて、それは困ると、以来三十年間、国際社会に訴え続けていたというふうにイラクの人は言うんですけれど、そういう中東の情報は私たちのところには全く届いていないし、正式に国連の機関に訴えたわけでもなかったみたいです。言論によらず武力侵攻したのは、本当にまずいことをしてくれ

たなあ、と思いますけど。物価の高騰などで反乱とか反フセインの要素というのはもちろんあったと思われるます。

私は前にキューバに行ったことがあるんですけど、イラクはとてもキューバと似た感じがしたんです。キューバもいたる所にカストロの肖像がありますし、やっぱり一種の強権政治を行なっている。街を歩いていると外国人と思って近づいて来て、「この国は本当にひどい国でこんな強圧的な政治の下にいることは、もう息苦しくて耐えられない」なんていうことを訴える人がいました。キューバのほうがイラクよりも外国人と接触することを禁じられていて、子どもたちが外国人と話をしようとすると、制止されました。その点はイラクのほうが自由に話ができました。

最初にスライドをお目にかける時に、「これは本当に切りとった一部の情報で、これがすべてではない」ということを申し上げましたけれども、自分で写真を写しながらも、どんなふうにも情報が切り取れるな

あ、という恐ろしさを感じました。自戒しなければいけないなあ、とつくづく思ったんです。

「報道」をすべて真実と  
信じてしまふ怖さ

女B イラクは外に進出していく気持ちはないと、おっしゃっている部分があるみたいだけれど、百万の軍隊と経済的困難は関連性があると思うんですけれども、齋藤 その百万の軍隊というニュースソースが何かということですね。

女B …… ええ ……

齋藤 確かに復員兵は街にあふれてましたから、十人に一人ぐらいは徴兵されたかもしれませんね。百万の軍隊ということは人口の六%の軍隊ということですね。半分が女だとすると、赤ん坊から老人まで含めた男の一二%、ものすごい数ですね。そういうことは本当に可能だったのか。その軍隊を維持するための費

用もいるでしょうし。イラクは軍事大国と言われていましたが、いたるところに武器を持った兵隊がいるという点では、話にならないほどイスラエルのほうが多いです。電信柱の数よりもっといっぱい兵隊がいるという感じでしたね。

女B ただイラクは六%ということはないんじゃない。もっといってるんじゃないの。人口が何人？

斎藤 人口千八百万人のうちの百万ということは約六%が兵隊ということですよ。

田宮 イラン・イラク戦争があったでしょう。私のイラクの友達もみんな軍隊を経験しているし、あのあと十八歳の子どもたちまで徴兵された。

斎藤 徴兵制があるので必ず一度は軍隊に行くわけ。田宮 ということはやはり、かなりの数の兵士がいたんじゃないか……。

斎藤 ただ正規軍が百万もいたかどうか。質という点も疑問ですね。イラク軍の兵舎は難民キャンプみたいでした。

女B でもそういうことは、他のアラブの諸国やイスラエルにとって脅威であつたんじゃないの……。

斎藤 イスラエルや湾岸首長国にとっては脅威でしょうけど、一概には言えないのではありませんか。イラクもイランも、イラン・イラク戦争の間にどんどん軍事大国になったわけですけど、イラン・イラク戦争の間中、西側はひとことも言っていないんですね、イラクが軍事大国化したことは。あれだけ武器供与したら、どれだけの軍事大国になるか一番知っていたのは西側諸国とソ連だと思えますけれども——そういう国が口をつぐんでひとことも言っていない。ところがイラン・イラク戦争が終わったとたんに、西側はイラク軍事大国説とフセインの極悪人説をいっせいに流し始めたわけなんです。イラクを軍事大国と言うならイスラエルはさらに問題ですね。第三次中東戦争なんではアメリカがうしろについて六日間で大勝利。イスラエルの領土を一倍半に広げたわけでしょう。今度、イラクが軍備を全部解いて非武装化するのは、とても



良いことだと思えますけれど、問題は相対的に、イスラエルのプレゼンスが非常に大きくなる。それは、アラブの諸国にとっては脅威だろうな、というのは現地を歩いて身にしみて感じました。

女C アラブが団結すれば、イスラエルなんて物ともしないわけですよ。

齋藤 でも団結して負けたでしょ。第一次中東戦争で女C でもエジプトからシリア、イラン、イラク、全部団結すれば……。

齋藤 抜けましたからね、その後。一番の軍事大国だったエジプトが抜けて単独で平和友好関係を結んで、サタト大統領はノーベル平和賞をもらったわけです。

女B それにしてもイラクの百万というのは、やっぱりアラブの人にとっても脅威だったんじゃないかしら。齋藤 アラブの人にとって、と言っても、いわゆる親

イラクと、湾岸首长団の側では違いますね。湾岸首长団の側にとっては脅威だったでしょうし、パレスチナやヨルダンの人にとっては、「もっとイラクが軍備を

強大にしてくれ」ぐらいの気持ちもあったらうと思いますよ。

女D クウェートに侵攻したというのは歴史的な背景もありますけれど、クウェートの人に見れば「まさか」というのはあったんでしょうね。

齋藤 これは、今日これから会場に来る予定の方にお話し頂けると思います。彼はクウェートの人なんです。パレスチナからクウェートに出稼ぎに行ってた人です。その人はたまたま日本にいる時に、クウェートの侵攻があつて、親たちは皆クウェート市内にいたそうです。日本から「どうだった？」と電話をかけたら、「えっ、侵攻があつたの？」と驚いたそうです。イラクが侵攻したというと、ものすごい市街戦か何かをやって侵攻したように思われているけれど、たった三十分だそうです。サバハ家だけを追い出したんで、市民は全く戦争があつたのも知らなかった。これは日本人でクウェートから逃げて来た人にも聞きました。

田宮 クウェート人と結婚した日本人の奥さんもそう

言っていましたよね。あんまり日本で騒がれてたから電話も通じないかと思って、クウェートに電話してみたら電話が通じる。おかしいなと思って「今、イラクが入ってきたんでしょ」と言ったら「えっ、そんなことあったの？」と言われたというキツネにつままれたような話があつて。

斎藤 つまり、フセインを何が何でも悪者にしなければ侵攻できないわけですね、米軍としては。だから、いかにフセインが悪いか、いかにひどいことをやってクウェート全土を制圧したかみたいな印象を与えた。

八月二日、八月五日に米軍が十万人サウジに行っている。ということは、よほど前から準備していないとできないと思います。沖縄の米海軍は七月に上陸作戦の演習をやっている。地上では四月から恩納村の「都市型ゲリラ訓練施設」で実弾演習を始めています。この施設は恩納村の人たちが一年以上不眠不休で抵抗していたのに、ピケをはっている村民の頭越しに、ヘリコプターでどんどん資材を入れて、とうとう建物をつく

り、四月に実弾演習を始めたんですね。世界がベルリンの壁が崩れて冷戦がなくなったと喜んでいる時にやったということは、シナリオが出来てたんだと思います。

私は、その時何となくレバノンとかその辺の感じはしたんですけど、アメリカは、やっぱり想定してたんだと思います。『ニュースウィーク』と『タイム』の四月号には、「世界で最も危険な男、フセイン」という大特集を組んでいる。ヨーロッパの新聞も雑誌も八年から全部フセイン極悪人説をいっせいに流していた、という話を中東問題の専門家に聞きました。それは、資料として提示することもできます。集めている人がいますから。でも、そういうことが日本の新聞にぜんぜん出ないから、とにかくフセインをやっつけるまで戦わなくちゃと、新聞の投書にもたくさん出てましたね。

私は戦中派で、子どもの時に、張学良は馬賊の頭領で、アヘン中毒で頭がおかしくなって、住民を虐殺し

ている、だから日本は「満州」を平定しなきゃ、というのをたたきこまれて育った世代ですが、このお正月でしたかNHKのテレビに張学良が出た。本当に上品ですてきな九十歳の紳士が、それこそ日本の首相にしたいような哲学のある話をきちんとしたわけです。それを見ましたから、フセインが極悪人と言われてもあまり鵝呑みにはしなかったのですが、張学良悪人説を覚えてらっしゃる方、おありですか？

女E はい、覚えています。

田宮 私はフセインが極悪人だったとか、それがどこまで真実かとかが重要なんではなく、そういうイメージというもののひとつで私たちが戦争を肯定してしまうということが大事だと思うんですね。今回バクダッドに入ってみて、やっぱり、私たちと何ら変わることはないいろんな考えをもったいろんな人たちがそこにいるんだということ、そういうことすら本当にわかっていなかったんだということがわかりました。そういう当たり前の生活が戦争の下で壊されていく。そうい

うことが、フセインのイメージひとつで許されてしまいう、それで戦争を肯定してしまう、という雰囲気がいちばん怖かったと、自分でバクダッドに行って思ったんです。

斎藤 私が言いたいのも同じことです。そういううわさ話みたいなものが流されると大衆がそれを信じてしまふ。積極的に意図的に作り出されたことでも、NHKが流しました、朝日が書きました、ロイターです、BBCです、っていうと、みんな何の疑いもはさまずに信じてしまふ日本人の精神構造というのは、やっぱりとっても怖い。それは、まさに「自立の心理学」で問おうとしているところでもあろうかと思うんです。

女F 私もそのことをちょっと気になりつつ聞いてたんで発言します。というのは、こういう世界規模の大きな話をしていると、どうしても、自分の日常から離れた特殊な話になる。身近に引き寄せないといけないという気持ち相当て心にかけていても、また何か他人ごとになる部分っていうのがどうしてもできてし

まうと思うんですよね。

それで情報操作ということが、今かなりいろんな角度から検証されているわけですけど、今の話を聞きながらフツと思ったのは、私は四国の松山から来ているんですけど、かなり前ですが、ヤクザがケンカをした話を思い出したんです。トルコ風呂かなんかにヤクザが入ってきて、人びとの目の前でバーンと本当に撃ち殺したらしいんです。ただ、そういう事件があったからといって、すぐ近くに住んでいるわれわれの所には何の事件もないわけですよ。ところがたまたまその時に、わが亭主殿が、東京に出張があつて飛行機に乗った。そうすると羽田で、ものすごい、モノモノしい警戒をしていたということがありましてね。松山に住んでいるわれわれにはクウェートの人と同じようにおそろく何の事件でもないんだけれど、たまたま松山のどこかの温泉にでもつかろうか、と思って来た人が「松山ってのは怖い。二度とふたたび寄れない」とか（笑）、そういうイメージ持ちやうとかね。体験から

くる印象も一つの情報操作につながるかもしれない、と身近なところに引き込んで理解することが絶対必要だと。

そういう意味でも、もう少し自分の目で見たいし、聞く機会も増えないといけないんだけど、田舎で、「このことを伝えたい」と思うことを伝える身近な場所がないんですよね。

## 勝ち負けの発想が

### あるかぎり

### 戦争は起こる

男A 湾岸戦争について一番質問したいのは、イラクの人たちは、戦争に負けたとはまさか思っていないんです。日本では「勝った、勝った」のNHKの号令でしたけど。

田宮 負けたというより、終わったからうれいというのが先にくるといふ感じがしました。私たちはイラ

クの人たちに戦争の話とか、フセインの話を極力しないように、ということで行ったんです。というのは、もしフセインが倒れた場合にも、彼らの発言によって彼らが今後どうなるのかという問題があるので、「フセインをあなたはと思うか、支持するか」という質問は絶対しないように、戦争の話も避けるようにしたんです。一度「あなたはこの戦争についてどう思いますか」って言ったら、向こうが「聞かなかったことにしてあげる」と言いましたけど。ともかくそういうコンタクトというのはほとんど持てなかったんですよ。だから向こうの人たちが今回の戦争についてどう思っているかというのは、正直言ってわからないんですね。フセインのことを支持しているかどうか、よくわかりません。ただひとり若い人が切羽詰まって寄って来て、「自分は亡命したいんだ」と、「みんな、こんなところでは生きていけない、みんなフセインのこと怖がってるだけだ」と、そういう意見もありました。ただ、それが全部だとも思わないし、いろんな人がいる

ということとは事実だと思います。

辻 単に戦争が終わってホッとしたという、その一心という感じでした。イラン・イラク戦争もあったし、もう戦争は本当にこりこりだという感じが、私は一番しました。イラクの人でけっこう友達になって話した人がいるんですけど、その人も本当に、そういう感じでした。

女G 負けたってことは知ってたんですか。

辻・田宮 もちろん知ってました。

斎藤 負けたのは知ってますけど、大衆は一对三十でやられたんだというふうに認識しているように見受けました。

非常にプライドがある人たちで、戦わないで退くよりは、負けるとわかっていても、あれだけの無理難題をふきかけられたら闘うほかなかったというふうに肯定している人もいます。立ち入ったことを聞く時は、全く他人がいなくて、ところで聞かなければならなかったし、そういう話も「名前とか、どういうルー

トで聞いたかは、一切公言してくれるな」と言われました。たとえば、「フセインは拡張主義ではない」と言った人も、「その話は自分の名前では絶対言わないでくれ」と。「どうして」と聞くと、「もしも反フセイン政権ができた時に、どんな目に合わされるかわからない」と。「フセインという個人よりも、システムが問題だ」と言った人もいて、私もなるほどと思いました。

イラクの中にも改革しなければいけない問題はたくさんあるけれど、私たちから見ても理不尽に思えるものでも、イスラームの原理から彼らがそれを遵守しようとしているのであれば、それは彼らの選択であって、フセインが政権についている限りは経済制裁を続けるという脅し方は、内政干渉であろう、政権はその国の国民が選ぶべきだと私は思います。民主主義ということとを信じるならば、民主的な政権を内発的に作って、そこでのいい制度に変えていくというのが、本当の外側からの援助の仕方だと思います。たとえばいま隣の韓

国に大きなデモがたくさん起きてますけども、日本が「韓国で内紛状態がある限り経済制裁する」と言ったら、ものすごく失礼なことだと思いますけれど、どうでしょうか？

しま イラクの人が勝ったと思うか、負けたと思うか、人によって違うと思うんですけども、一般論として、やっぱり負け勝つ、という発想があるから、戦争があるんじゃないかな、と、こう逆転して思うんですね。

で、いま、四国からおいでになった方が、抽象論ではなく、私たちの身に引き付けて、ということでお話しになりたいという意味、よくわかるんですが、その辺に引き付けて、今、負け勝ちの発想が先にあるから戦争になっちゃう。多国籍といういいかげんな名前のついた西側の発想では、自分たちが勝ったとは信じているわけですね。

そこで私たち日本人としてどうだろうという方向にお話が進むといいですね。

男A 私はいろいろ興味をもって、イラク大使の話や

PLOの日本に來られてる人の話なんか聞きに行ったりしている時に、全く違ふ論理が日本で話されてて、やはりどうも、西側のほうがおかしいんじゃないかと前から思っていました。

今回は情報戦と軍事力の巨大さと、国連の不甲斐なさに憤りをもっているんですけども、やはり、イラク側の論理と両方を聞いて、しかも、今みたいに行かれた人の話を聞いて、民衆ではどうだったのか、というのが検証されなければ、本当の歴史の真実はわからないと思います。やはり戦争を阻止するには民衆の力しかないと思います。

斎藤 同感です。私はこの戦争をどうして止められなかったんだろうか、という悔しさというか、不甲斐なさで、本当に生きているのがいやになるような気持ちにまでなったんです。自分に引きつけて言えば、これは私だけじゃなく多くの人の中に、「アメリカはいくらなんでもそこまではやらないだろう」という樂觀主義があったんじゃないかと思うんですね。それは、ア

メリカを信用しているからというよりも、私の個人的な分析で言えば、私は自分の感覚がものすごくよくなっていたと思うんです。たとえば、地上げ屋が、どんなに理不尽に家をぶっ壊しても、いつの間にか私たちはそれを認めて、見過ごす。そういう日常的な感性をどれだけ研ぎ澄ましているか、いろんな情報をどういうふうに受け止めていたか、そこが問題だったような気がします。イラクに行って帰って来てから新聞をもう一度読み直してみても、「おや、全部、テヘラン発だ、カイロ発じゃないか」とあらためて気がついたんですけれど、湾岸戦争で頭がカッカしている時は、発信地は確かに一応は見てたんですけども、今、この身に突き刺さるような感覚では見ていなかったという部分があった。それが、私たちがこの戦争を止められなかった、大きなバネのひとつじゃないかと思っています。皆さんのご感想もいろいろかきたいと思っています。

「安」こそ「安保」を考え  
その「おかしさ」を

### 言葉化しよう

女性H ここにいらしている中で「西側を正しい」という方はあまりいらっしやらないんじゃないかという思いがしているんです。やっぱり、今、司会の方がおっしゃったように、これからいかにつなげるかですね。私たち日本にいる者として、九十億ドルの援助もし、

「目減りした分は払え」と言われて追加を出し、戦後ずっと平和憲法を、タナボタみたいにしていただいて、それをありがたく今日まで死守し、それで突然湾岸戦争が始まれば、「ひとりの兵隊もよこさないでお金だけ払っても評価しない」と言われる。その関係って安保じゃないかな、と思うんですね。大変難しい問題なんですけれども、これが原点だろうと思うんです。ほかの場では言えませんが、あえてこの難しいことを

皆さんはどう考えてらっしゃるか。特に若い方が、これをどう受け止めていらっしゃるか。安保って、くつがえせないものではなく、十年ごとに改正するものなんです。それを日本人が自主的に何も考えず、議論せず、今どんなきれいな言葉を並べても、それはどんな説得力もないんです。だから、もうとつてもきびしいことなんで、これ以上の発言は今は言えないんですけど、そのことをどう思われるか、ご意見があったらぜひ聞きたいです。

辻 私は小学校の時に日本の憲法を勉強して、本当にもう感動したんですね。その民主主義、平和主義に。日本の平和憲法ってすばらしいものだって子どもながらに感動したんですけれど、その後歴史を学校で勉強してる時に自衛隊ってのが出てきて、安保が出てきて、本当にもう素直に、「これは絶対おかしい」と思ってたんですね。特に今回、一月に戦争が始まってから戦争反対運動をしてる時に、いかに権力ってのが大きいかってのを本当に思い知らされてしまって、政治だ



けじゃなくて、経済、文化の面まで及んでいると実感したんです。ですからただ単に、今、安保反対っていうふうに言っても、なかなかこれはくつがえせないっていう気が、今、すごくしているんです。

今からどういうふうにすれば、自分がおかしいと思っていることを、正せるのかって、まだ具体的にわからないんですけども、今はとにかく、今までけっこうふつうに通り過ごしていたもの、たとえば、中東に対するイメージの問題にしても、本当に自分で単に自然にもってるものだと思っていたんですけども、それはやっぱり誰かが故意に作ってたものだって、実感したんですね。

そういうところが今、やっとわかりかけてきた……。今はそこまでしかまだいってないんですけども、これからそういうひとつひとつ、今まで当然だと思っていたものを、検証してみようと思ってます。そこから具体的に安保をなくすっていうふうに繋がっていくんじゃないかって。

具体的には、私は安保はおかしいと思ってるんです。絶対に平和憲法と相容れないものだし、そういう力の論理は、絶対に憲法違反だと思うんですよね。もし日本人が、みんな反対だっていうふうにして立ち上げれば、それはもう当然なことになると思うんですよね、本当は。だからそういう運動もやっていかなきゃならないと思っているんですけども、もう少し現実にもその前の段階っていうか、日本人が今までいろんなものを当然だと思っていた、そのことひとつひとつがおかしいんだ、っていうふうに言っていくことを、まず私はしたいな、と思ってるんです。

女― 神奈川に住んでいます。神奈川にはものすごく米軍基地が多いんですね。で、個人的な感情としては、安保ってのは、どう考えてもおかしいと思うんですよ。「北方領土返せ」とか言ってるけど、厚木とか横須賀のほうがよく日本固有の領土じゃないか、よっぽど返してほしいなあ、と思うんですけど（笑い）。でも、もう一面の真実として、たとえば、厚木なんか

では、基地に働いている日本人がいるわけですよ。

基地によって街がもっている部分もある。だから、そういうことも含めた上で考えてかなきゃいけない。沖縄なんかも、やっぱり基地で県がもっているっていう部分がかなりあると思うんですよ。そういう面まで考えないで、ただ、「反対、反対」では、やっぱり六〇年安保の二の舞いになるんじゃないか、とっています。

女E 私は六〇年安保の時は、ちょうど国会の下真ん中で働いておりました。その時のことを考えると今でも胸が熱くなるような気がするんですけど、あれだけの大きなエネルギーを使っても、とうとう安保は通ってしまった。それから経済成長が始まって、岸内閣が倒れて池田内閣になって、所得倍増論を出した。それが今日の豊かさの原点になっているわけで、こういう豊かな時代にあれと同じことができるかというとなかなか難しいと思うんです。政府が考えているのは、憲法を九条よりむしろ別のところからだんだんなく

ずしにしていこうという動きのほうが強いんじゃないかなあ、という感じがします。ですから憲法論議のほうを真剣に考えていかねばいけないのではないかと、という気がするんです。

今度の湾岸戦争を契機にして、そういう、一方では「この憲法があるからダメなんだ」という論議が非常に盛んになってきている。これも大変大きな情報操作じゃないかという気がしますね。その危険を、まずは、私どもは今、考えなきゃならないという気がします。

斎藤 それは重要な指摘ですね。国連と日本の憲法はとても関係があると思うんです。国連憲章の第二条に、「武力による恫喝、武力の行使は行わない」と言っている。日本国憲法と同じことを言ってるんで、私たちは国連を信じてたわけですけど、今回のことで、国連憲章を、ずーっと読み直してみると、いたるところに矛盾がある。終わりのほう、四十二条、四十三条あたりになると、武力の行使も正当化するような文言がある。第二条っていうのは国連全体の、それこそ哲学を

語ってる部分ですが、そことの整合性が全くないわけ  
です。

湾岸危機に際して前文という国連の一番エッセンシ  
ヤルな部分を脱ぎ捨てて武力行使に踏み切った時に、  
国連自身が自殺行為をしたんだと思いますが、国連憲  
章が風化したと同じように、日本がいろんな法律の読  
み方を変えること、定義を読み替えることによって、  
掃海艇でも何でも出していくところがあるが、やっぱ  
りとても怖い。

私はいま日本は憲法九条があるから怖いような気が  
しているんです。九条があるから私たちは安心してい  
るけれども、国連憲章が風化したのと同じ構造でやら  
れてて、しかも、まさに世界的なメカニズムが働いて、  
「世界新秩序」の基本になろうとしている。このこと  
を考えなかったら、やっぱり私たちの明日はないよう  
な気がするけど、どうでしょう。

辻 六〇年安保のことは、小さかったんで知らなかつ  
たんです。でもそういう年代を生きた作家の本なんか

を読んできて感じるんですけども、私たちがというより  
私が今何かするとしたら、「何とか反対」っていうよ  
りも、ともかく、たとえば安保がなくてもいいような  
世界を作るために何か自分がいいと思うことをどん  
どん実践していこうと思ってるんです。「反対」って  
いうのと、いいと思うことを実践するのって、両方、必  
要だと思えます。「戦争反対」っていうにしても、  
反対運動っていうよりも、平和運動……何とかをつく  
ろうというふうに個人的に活動したいと思ってるん  
です。

女J 私も安保と今回の日本の援助の問題は切り離せ  
ないと思っています。アメリカも含めて世界から「と  
もかく、それなりの行動をしろ」という要請がずいぶ  
んあったわけですが、私の印象は、米の自由化とか経  
済摩擦と同じような感じのクレームとして私たちが受  
け取ったという感じがします。

アメリカの働きかけは、やっぱり安保がらみで、そ  
れを抜きにしては論議できないと思うんですが、湾岸

戦争の解説的なテレビ番組をみていても、安保とのからみで問題を出していったのは、私が見たかぎりではほとんどなかったと思うんですね。それを出せば、問題の構造っていうか、今日本がおかれている状況とか、すごく認識できたと思うんですけども。

去年安保の期限切れで更新をやりましたよね。もうすでに九〇年の引き継ぎをやってしまったという状況の中で、安保は過去のことじゃなくて、本当に、今、突き付けられていることだなんて思ったんです。いわゆる評論家とか研究者たちが、安保にほとんど触れていないっていう現実ってのは、何かやっぱりあるんでしょうかね、そこらへん情報がわかれば教えてほしいのですが……。

斎藤 何かの圧力が働いたのか、日本人独特の「縮み思考」なのかわかりませんが、そのへんを説明するどころか、「社会党が落ち目になったのは、安保や自衛隊にこだわりましたから」という世論がつくられようとしていますね、ジャーナリズムによって。

女F アメリカに行って、民衆レベルで「安保ただ乗り反対」っていうアメリカ市民の風潮、「日本は自分たちの安保をただ乗りしたおかげであんなに経済成長しているんだろう」という批判の強さを本当に身にしみてまざまざと感じたんですよ。ケンタッキーは農業圏で多少保守的な風土はあるんですけどもね。

私は小さい時に、けっこう負けん気はあって、負けるのは嫌いだけれど、勝つのはそれ以上に嫌いだったんですね。だから勝ち負けの物差しからどれだけ自由になれるかしかないというのは、相当思いつめて考えてるはずなんですけど、ふと気づくとやっぱり、勝ち負けの論理をまだまだ克服してないということが、何度もあるんですよ。だから、力の論理はそれほど簡単に除けない。民衆レベルで「何で日本はタダ乗りしてるんだ」という、この力の強さに啞然とするとき、力の論理がかくも働いているという、絶望感に、ふと、とらわれるようになるんですね。

しま 私自身も「力の論理」、自分の頭だけじゃなく

て体が力の論理を、個人的に拒否しているつもりでも、

乗せられているって思うことが、よくあります。六〇年安保体験もありまして、目の前で樺美智子さんが亡くなったっていう、すさまじい体験をもってるんですね、あの力の論理でやられてしまうんですね、私たちは民衆は。それがあつ限りのやっぱり政治をやっている人たちは、私たちの感覚に近づけない。私がもし総理大臣なんかになっちゃったら、きっとそうなるだろうと思うんですね、恐ろしいことだと。そのことをやっぱりわかっておかなければなりませんし、その上で、日本のさっきの憲法九条にちょっとふれますと、あれは日本の憲法っていうより、人類の戦争を調停できる、すごいパワーをもったもので、そういう役をしないといけない。Eさんがおっしゃったように「憲法九条があるからダメなんだ」というあの論理に、対抗するだけでなく、うまく組み合せて解決するやり方を出していかないとまずいと思うんです。力の論理でやられてしまう私たちだから、そう言いたいってことを、みんな

なでもうちよつとたくさん言い合いませんか。

## 報道されないイラクの現状

男B 日本は今回掃海艇を出しますが、ドイツでも掃海艇を初めて出すし、陸軍も今までトルコまでNATO軍の常駐としていたのをクルド事件が起こったら実際にキャンプ地に出した。戦後、ドイツと日本は、二度と戦争をしちゃいけないっていうひとつの誓いを立てたのに、なしくずし的に変わってきた。歴史の違った歩みが始まった証拠だと思っんです。私たちは戦争に對してもっと怒りを感じないといけないと思います。せっかくイラクに行かれたので、私はもっと向こうの話をうかがいたいんですけども。イラクの人たちが国連をどう思っているかとか。私なんか国連てのはもうメチャクチャだっと思っちゃいますね、イラクの民衆からそういうのをなせ聞けないのかなと、さびしいというか、せっかく行ったのに。

田宮 ひとつは言葉の問題がありますね。私たちはアラビア語がしゃべれないものですから、接触できる人が限られる。もしアラビア語がわかれば、そういうチャンスも作れたかも知れないんですけども。それと交通機関が動いていなかったのも、あまり行動ができなかった。一般の人たちの中に飛び込んでいく機会が少なかった。大部分はオフィシャルつきでまわってたんです。それと時間が短かった。

男C 電気が止まってるっていうけど、ラジオは聞いているんですか。

田宮 電池で聞いていたようです。戦争中はずっとラジオで、情報は流されてみたいんです。

男C 私、医者なんですけれども、水道が止まってるっていうのは、伝染病まんえんの一手手前ですね。日本の戦争が終わった時は、ご存知のように悲惨な状況ですね。食べるものもない、それから水ももちろんないし、メチャクチャ。私は戦後の人間だけど、資料で読むと、そういう悲惨な状況になってるんでしょうか

ね。

田宮 水道局が爆撃されたわけじゃないんです。どうして水道が止まってるかというところ、バクダッドというのは平地ですよ、そこに水を流すためのポンプ、つまり発電所がつぶされているから水が流れないんですよ。だから発電機さえ直れば、水は流れるはずなんです。私たちが行った戦後一か月の時点では実はもう三〇%くらいが水は復興してたんですよ。柴田さんという、ジャパンボランティアセンターの人が水道局まで行って、むこうの総裁みたいな人と話をした上でデータなんですけども。バクダッドは、私たちが行った三月下旬の時点ですでもう耐え難い暑さ、湿気はないんですけど、すごく暑かったんですよ。これでもし水が出なければ、汚水の問題もありますし、これから伝染病がどんどん出るだろうなっていうのは本当に実感しました。二次隊の人の話では、水も半分以上今は出てるって話です。本当のところ、よくわからないんですけども。ただ悲惨なのは、バクダッドじゃなく

て、もっと周辺なんです。本当に援助の手が届かない所、水や電気が全くない所、そういう所の情報が全くないわけです。

男C 食べ物はどうなんですか。マーケットには行かれたんですか。

田宮 店はもうたくさん開いてるんです。ただそこで売られているものの値段が、べら高なんです。たとえば、イラクの平均月収が百から百五十ディナールのところを、わたしたちが一食レストランで食べると、二十ディナールなんです。五食食べれば、一か月の月収が飛んでしまう。それで、給料は、ぜんぜん上がってないんですね。物価だけがべらボウ、開いている店は全部、ヤミ値で売っているって考えていい。百五十ディナールの月収では全くやってけませんよ。

男C じゃあ、次から次に栄養失調で死んでいくんですか、状況は。

田宮 バクダッドでは、まだ物があるだけマシなんじゃないかと思えます。それでもその時点で、今まで見

たこともないような栄養失調児が発生しているっていうのを保健省の方から柴田さんが聞いてきて、私たちに教えてくれたんです。それでまだ経済封鎖が続いていますから、イラクは飢えにさらされている。クルドのことがあれだけ騒がれてるのに、どうしてイラクのことが騒がれないんだろうって思います。私たち自身が、経済制裁に完全に加担しているわけですよ。それなのに、そのことが言われないっていうのは、行っただ者としては、向こうでは今どんな人も死んでいるだろうし、っていう切ない気持ちです。

男C ミルク工場が破壊されましたけど、今ミルクはないんですか。

斎藤 ミルクはないですね。ヤミ市で二カン買ったらお給料が飛んでしまうという状態です。しかも母乳が、母親の七〇%が出ないんです。母親も栄養失調なので、イラクは社会主義国ですから、食糧も全部平等に配給してたけど、輸送機関がない。クルドの問題も、辺境地域は、配給がバクダッドに比べたらかなり悪く、空

腹でたまらなかったことも一因だろうと言っている人がいました。カルバラとかナジャフも、人の栄養状態、ハダの色艶が悪いように見えました。内戦のショックもあるかもわかりませんし、都市と農村の子どもは違うのかもしれないけども。

医薬品、特に使い捨ての点滴とか抗生物質、消毒薬、注射針、縫合用の針や糸を、二次隊、三次隊と、どんどん送りましたが、それでも医者さんがとてもつらいというんです。患者が来ても、打つ手がない、と。さっきも薬のない、カラッポの薬棚をスライドでお目にかけたけど、あの時、最後にひとつ残っているデイスボーザルの点滴と同じものがほしいと言われて、じゃ、それを日本に知らせるために、日本に持ち帰ると言って寺沢上人が取ったんですね。そしたら、お医者さんがほんとに悲しそうな顔をして、追いかけてきた。たった一つしかないものを持っていかれては困るという切羽詰まった様子が感じられました。

女J 日本からの医薬品に日本語の説明がなく、た

だ送ればいいわという援助なので、物は届いても無駄になることがあると聞いています。何かなさる時には、そこまで配慮してほしいなあと思いますね。

女K 私はお菓子と薬を作っているメーカーに勤めています。湾岸戦争の時には薬を寄付させていただきました。私たちはアラビア語に訳したものを添付して送りましたが、どういうふうに使われているかわからないし、弱ってしまった体に抗生物質を与えても、どこまで効くのだろうと思ったんですね。送った後で政府から感謝状をいただいてもうれしくもないし、どういうふうに使われているか全然わからない。それだったら子どもたちにビスケットを一枚でもあげたほうが栄養になるんじゃないかという気もしますね。たとえば、注射の針が全然足りないということは、メーカーには全然わからないんです。もし先に情報が入っていれば、何に効くかわからない抗生物質よりも、もっと身近なものを送ってあげることができるんです。

斎藤 何が足りないか、イラク大使館に聞いて用意し



たのですが、現地では外科的なものが足りないとお医者さんは言っていました。消毒薬とか、縫合する針とか糸とか全然なくて、みすみす助けられる者も助けられない。内科的な感染症も、栄養失調を治さなかったら治らないなあと言っていました。体力そのものがなくなっているのに細菌感染するわけですから。私は戦後の栄養失調を見ている世代ですので、それはよくわかります。私自身、ヤミ屋の娘と間違えられるくらい丸々と太っていたけど、栄養失調で太っているものだから、全然走れなかったんですね。心臓が苦しくて。男C 栄養失調になると低蛋白になって、おなかに腹水がたまってきます。普通は腹膜から還流できるんだけど、それがぶくぶく膨れてくる。腹水が外へ出るというのは異常な状態なんで、肝硬変なんかの時と同じ状態です。蛋白をある程度、点滴で補給してやらないと、いくら感染症で抗生剤をやってもよくならない。基本的な蛋白量が維持されたり、血液の中の赤血球がある程度ないと、体に栄養が循環されていく力もなく

なっていく。だから食べられるうちに食べさせていかなくては。点滴するような人は口に入っても嚙む力がない状態なんです。

## ものごとの

### “本質を見る目”を

### どう鍛えていくか

田中好子 時間がないんで途中で帰らせていただくんで、話が行ったり来たりで申しわけないんですが、ちょっと発言させてください。私は八二、三年から中東・パレスチナのことをずっとやってきた者です。実際バクダッドの状態はもちろん悪いんですが、こういう事態というのは、初めてではなくてここ十年ぐらい、ずっとあるわけなんです。

たとえば、今レバノンのベイルートでは、相変わらず水道をひねってもほとんど出ない。二十四時間に二時間出る程度です。そしてほとんど、海水そのまま

たいなのが出ている。バクダッドは、まだそれほど瓦礫じゃないかもしれませんが、ベイルートは場所によって、瓦礫のままなんです。パレスチナ人の住んでいる所はほとんど瓦礫の状態です。それから、みなさんも見てこられたと思いますが、占領地域、イスラエルが占領しているヨルダン西岸とガザは、戦争中は最低で四十二日間、二十四時間外出禁止令が続いたわけです。ある町では、八百八十時間外出禁止令で、外出禁止令がなかった時間が総計で十時間とか、そういう生活をずっとしていた地域があります。

全体的には、中東の湾岸戦争とその前の八月からの半年以上の政治混乱で、イラクの人、クウェートの人以外にヨルダン人、それにいろんなところに散らばっているパレスチナ人、それから、湾岸諸国に出稼ぎに行っていた、パキスタンとか、バングラデッシュとか、インド、スリランカ、フィリピンとか、そういうところも全部含めて、ものすごく大きな被害が出ているわけです。私も、三月、四月とパレスチナに行っ

びっくりしたんです。半年前とまるで変わっている。湾岸戦争を経過した半年間の変化っていうのは、私たちの想像を絶するものでした。初めて行った方はその違いは、あまり感じられないかも知れませんが、ヨルダンにしてもパレスチナにしてもやっぱり、めちゃめちゃになっているわけです。だから、今、緊急に、どこに、どのようなものを送るかということはもちろんあるんですが、同時に中東地域全体が混乱していて、その混乱は恐らく一、二年ですむことはなくて、これは、五年、十年かかることですし、同時にさっき、なぜアラブは一つにならないのかという話がありました。アラブの中でも産油国、石油がとれて、お金持ちの国とそうじゃない国があるし、お金持ちの国の中だつて、いろいろな社会矛盾があるわけです。ほとんどのところは、石油が出ない、貧しい国です。だからアラブが一枚岩にならない原因は、たとえばアメリカから経済援助がほしいとか、そういういろんな要素がからんでいるわけです。

私は、果たしてアメリカが中東地域に新秩序を確立することができると言えば、ほとんど無理だろうと思います。みんながお手並み拝見といっただけでいるというのが正直なところだろうと思います。

イスラエルの強硬策というのが、中東和平の中では今いちばん大きな問題なんですね。そしてそのことは、世界の世論が変わらない限りは、今の事態は、今後十年も続くだろうというのは、確かだろうと思います。つけ加えさせていただければ、私たちはパレスチナの子どものキャンペーンをやっています。パレスチナの子どもに関心のある方は、ご連絡いただければ、具体的にどうなっているのか、お話しすることもできますし、資料をお送りすることもできます。

齋藤 ごめんなさい。パレスチナ問題の専門家、田中好子さんにせっかくおいで頂きましたのに気がつかず、お話を十分伺えなくて残念です。それから、今日おいになる予定だったフィロスさんから、連絡がありました。突然日曜出勤を申し渡されたので、とても残念

だけど参加できない、ということですよ。戦後クウェートからヨルダンに逃げた一家五十人を彼一人が今養っている状況で、やっと見つけた職業を失いたくない、日曜出勤はつらいけれど、上司のことばに背けない、というのです。これが今のパレスチナ人の状況なんです。ほんとに残念ですが。

日本政府は自衛隊機で難民の輸送に手を貸すと言いましたけど、今の田中さんのお話のように、難民が帰った先の受皿がないんですね。そもそもアジアの人にしても、アフリカの人にしても、中東の人にしても、出稼ぎせざるを得ない構造があるということのほうが問題なんで、その構造的な問題を解決しないと何にもならないわけです。今ベーカーさんが中東を飛び回って和平交渉を、と言っていろいろやっているのは、イスラエルをいかにして認知させるかに懸命になっているんですね。南アジア、東南アジア、西アジアの根源的な問題は無視して。

今朝のNHKテレビをご覧になりましたか。イスラ

エルが八一年にイラクの原爆施設を攻撃した映像を出してまして、「その当時はイスラエルは国際的な非難を集めたけれども、今になって、イスラエルの行動はよかったというふうに国際的評価を得られるようになったのでこの映像を流します」と言ってニュースで流した。私はとってもショックを受けたんです。「NHKがその行為を評価するので流す」というのなら、まだわかるのです。「国際的評価を得られるようになった」という言い方は、米国連合軍を「多国籍軍」と称して、「貢献しなければ」というイメージをつくり上げたのと同じ手法のような気がします。

女C 怖いですね、その話は。

田中 イスラエルは世界で第六番目の核保有国で核弾頭を百発以上持っているということは、内部告発ではつきりしているんですね。実は昨年の初めから、中東和平全体の交渉が行き詰まっただけで、その時はイスラエルとイラクの間で戦争がおきるのではないかとすでに中東ウォッチャーたちの間では心配されていたわけ

です。

その場合にどちらが先にしかけるのかわからないね、っていう話があって、イラク悪玉説が出たのは、昨年の始めからで、日本の新聞では、フセインは直接非難されてはいませんでしたけど、イラクがイギリスの国籍の記者を処刑したとか、すごく大きなパイプラインをつかって大砲を射とうとしているとか、そういう断片的な記事としては日本でも入ってきてました。ただ、それがこんなふうになっていくとは、みんな見てなかったでしょう。

クルドもすごく複雑なところなんですけど、クルドがこんなふうにならないうちに難民になって出たのは、実は八八年にもあって、その時はだれも無視していた。ただ、今、アメリカにしてもだれもが怖いのは、イラクがばらばらにならないうちにシリア派が出て来て、クルドが出て来たら、これはサダム・フセインより困るのではないかと、この思惑もあるのです。自国民がどう考えてるかとか、その地域の人はどう考えてるかとかの立場ではない思惑

が、中東をいまだに支配しているところがあるという感じはします。

女F アメリカが音頭をとって中東和平会議が実現できれば、問題はかなり解決するのではないのですか。

田中 アメリカが介入すればいいとは、私は全然思わないんです。アラブの人たちが民度が低いかといえば、私はそうは思いません。どこだってそうですが、第三世界と言われるところだって、実際行ってみたら、そうじゃないっていうのはどこも同じだと思います。アラブの場合は歴史的蓄積もありますし、けっこう民度は高いと思います。日本人よりたくさんの方が英語はしゃべれると思うし、それが民度かどうかはわかりませんが、それほど孤立した社会だとは、全然思いません。

これからどうなるのかわかりませんが、エジプトなんていうのは、いろんな意味で、いろんな失敗をしてきて、借金もたくさんあって、軍事費もすごく大きくて、そんなこともあって、今の政権はアメリカにつ

いていくと思う。そうすると当然そうじゃないという人たちもいるわけです。たとえば、これからはイスラムと結びついていくという人たち。イスラムというのは、シーア派だけでなく、スンニ派にだって原理主義者はいるわけです。たとえば、今イラクでは、スンニ派の原理主義者は強くありませんけど、ヨルダンとか、パレスチナの特にガザとか、レバノンとか、エジプト、こういう地域では全部、イスラムの復興をうたっています。つまり、西欧的なもの、アメリカ的なもの、ヨーロッパ的なものに自分たちがある意味で負けたとすれば、何に自分たちの拠りどころを持つかといった時に、やっぱり、一番体系だったイスラム的のものにいくというのはあるんだろうし、それがいろんな形で出てきているのは一つの自然だと思います。これに対して、西欧社会のほうは、イスラムは怖いとかいうふうになってくるところもあるし、難しいところだと思いますね。

負けたか、負けてないかというところの感覚の話を

されてましたけど、もしかしたら、一年や二年、サダム・フセインの政権は続くと思う、そうなった場合、イラクは果たして負けたと思うかという、思わないだろうし、アラブ社会の中で、やっぱりサダム・フセインはがんばったという評価になるかもしれない。

実は、中東ウォッチャーしている人、ジャーナリストから学者まで含めて、まっとうに中東のことを分析している人たちは、戦争は始まらないのではないかと、ずっと開戦直前まで言っていたわけです。わたしも含めて、合理的に考えれば、そういうふうになるはずがない、と。始まればどうなるか見えてるわけだから、始まるはずがないと言いつけていましたが、これは、願望がまじっていたと思うんです。

ところが考えてみるとアメリカは最初から戦争したかったんですね、そのところを私たちが見抜けなかった。だから、長いこと中東問題をやってましたと言ったけれども、それは恥というか、私個人に限りませんが、みんながそういうふうになってしまった。平和

運動をやった人もそうだったと思います。そのあたりのところ、もう一回、自分たちの分析とか感じ方とかを冷静に見直すべき時かな、と思います。

女 L 私たちも含めてやっぱりきびしく見ていないというか、なんとなくアメリカが悪いとか、ぼんやりとした感じで、あんまりいろんなことを考えてこなかった。

## 平和をめぐる

### 女性性・男性性

しま 現在、日本では教育がなされていなくて、プロパガンダになっているような気がする。教育自体に、「私はどう見るのか」を訓練してくれるチャンスが無いですよね。最近の教育とからめて、私たちの問題に身近にひきおろして、もう少し続けてご意見をいかがでしょうか。

女 G 田中さんのお話を聞きながらいろいろ考えてた

んですけど。難民を自衛隊輸送機という話があり、国会を通してしまったけど、結果的には、自衛隊機は出発することはできませんでしたよね。民間がお金を出し合って、飛行機をチャーターして、どんどん難民輸送を始めた力があつた。日本政府がオルダンの政府から、止められたということもあつたけど、やっぱり民間の、私たち一人一人の力がすごくあつたと思うんです。ただ掃海艇に関しては、とうとう止められませんでしたよね、悔いが残っています。

今、田中さんから、中東の平和安定には、二年から三年、もしくは十年もかかるのではないかという話がありました。見通しとしては世界世論を盛り上げる以外ないんじゃないかと思ひます。アメリカの考へている新秩序的なものにまかせてられない、みんなの力を出して盛り上げていく、私たちもだまっていなくてやっていくということが大切だと思ひます。一人ひとりの力はなくとも集まれば大きな力になっていくと思ひます。この前も新聞で、日本のどこかの高校生がアメリ

カの新聞記者に手紙を出して、自分の国の憲法九条のことを、自分の考へで出したところ、その記者が自分の新聞に大きく載せてくれた。そうすると国内で大きな反響をよんで、日本にはこういう憲法があつたのか初めて知つた、そういうことは理解できる、と大きな反応があつたと出ていましたが、こういう一人ひとりのさりげない訴えでも、隣の国に伝わっていくということをととても感じました。その前に有名な人たちが憲法九条のことをアメリカの新聞でキャンペーンしたのもありました。それ以上に、一市民がそういう形できとりあげて載せてもらったほうが訴える力があるように思ひますから、こういうことを大事にして、望みを捨てず私も中近東に早く平和がくるために何かとやっていきたいと思ひます。

女M 侵略というのは何か。たとえば「侵略者フセイン」というパターンで悪玉にされていますが、侵略というのは何なのか。ほとんどの争いというのは、国境線の線引きにあるわけですね。そこで勝、負という考

えが出ているわけですけど、日本の米軍基地は侵略ではないのかどうか。中東の問題をきっかけに、中国とソ連の間の国境線の問題とか、北方領土の問題が噴出しましたね。一方で国境をなくすボーダレスの時代というふうなことが言われながら、またそこで侵略の問題が非常に大きく世の中を動かしている。そういうことについて、これからの未来社会というのは、どうなっていくのだろうとしみじみ考えるわけです。戦争はそれを切り離しては考えられないと思いますが、いかがでしょうか。お考えをうかがいたいところです。

男D へあごろゝの集会に関心をもってうかがいました。女性は今平和愛好家だって言われますけど、今度の湾岸戦争では、アメリカから女性が兵士として行きましたね。そして、アメリカのフェミニスト運動も湾岸戦争を肯定したわけですよ。クウェートでイラク兵が乱暴しているということで世論が盛り上がって、アメリカのフェミニズムは肯定したと聞いています。イギリスのサッチャーもブッシュ大統領に、ジョージし

っかりしなさいと戦争をたきつけた。そうみえてくと女性は必ずしも平和を愛好しているとは言えないのではないかと考えざるを得ないわけです。やっぱりこれは、女性とか男性とかじゃなくて、人間のもっているメカニズムとして、自己制御できないものを文明論的にとらえて、戦争というものを考えないと、押さえきることができないのではないかと、そんな感じがしています。

女C きのもへあごろゝで、女性であれば何でも平和主義者だ、女であればいい、という感じで思われると困るから、女でもこういう条件が必要なんだという形でやっていかなければダメだという話が出たんです。ただ、反戦運動でも、行動の主体が女性に移ったというのは事実だと思います。私は渋谷駅前で請願署名を取ったり、YWCAの呼びかけで湾岸戦争の難民輸送募金活動を大宮駅前でやったんですが、圧倒的に女性の署名が多いんですね。やっぱり女性のほうが圧倒的に早く敏感に、自分の子どもがもしも、という気持ち



で立ち上がる。やっぱりさすが女性だなと思う。男のいわゆる企業戦士とか、いま一番日本の経済的なものを背負って立っている人たちは戦争賛成だと捨てぜりふを残していくんですね。行動する、表現する、社会的に結び付くようなことは、今までは男性主導型だったのが、女性主体になったと思うんです。

芸術的なことでも、観客は九割がた、女性ですね。いろいろな所で女性が圧倒的に今は活躍している。サッチャーさんとか、フランスのクレソンさんとか、女性も指導者として表舞台に立つようになったけれど、あの人たちは男性の価値観を引きずっているからこそ、男性が「あの人だったらもち上げられる」という形で存在している気がします。これからは女性の発想の中で価値観をきちんと築いていく人たちがどんどん成長して、男性が苦々しい思いをする時代が来るんじゃないかと思います。今は、男性主導型の価値観の中で、マドンナだと言われて、男の価値観の中でも役立つような、男をつぶさないやり方での女性の主導型は出

てきているけど、むしろこれからは歴史をつくる中から、本当の意味での女性性が出てきて、その中から男女平等が、はっきりしてくるのではないかという気がするんです。

斎藤　そういう流れは、たしかに感じますね。ただすぐに、女性が、とか、男性が、とかに区分けすることを私は、疑問に感じています。行動の差は性の差というよりは個々の人間の差だと思う。日本の場合、女性のほうが、今回敏感に反応したのは、日本の女の置かれている場が生活に密着しているからで、わが子かわいさというよりは、企業人になりきっている男性より皮膚感覚があるからではないかと思えます。

アメリカのフェミニストも戦争について全部が賛成したわけではなくて、多くの反対運動があった。海外の会員からも、よくぞ反戦を問いかけてくれたという手紙をいろいろもらっていますが、彼女たちのやったことは日本では報道されなかったわけです。皆さんが新聞とかテレビでしか情報をご覧にならない、それが

与論をつくっているということは、大きな問題ではないかと思います。

それからアメリカが女性の兵士を今度派遣したことに、私は大きな疑問をもてましたが、アメリカの女性兵士のたしか二〇%近くが妊娠したという記事が出ていました。これは、いわゆる従軍慰安婦のかわりに女性を合法的に出したんではないかと直感的に感じたんです。そういうこともありうるんじゃないかと思うんです。アメリカの中で、女性の徴兵に賛成しているのは、ほとんどNOW（全米女性機構）だけです。NOWと草の根のフェミニストグループはかなり反目しあっていますね、前々から。ただNOWは力が強く、PRも上手だし、NOWの意見が代表的なアメリカのフェミニストの意見として紹介されがちなんじゃないでしょうか。

田宮 さっきからずっと話が出てたんですけれどやっぱり女性がよくって、男性が駄目だとかいう考えは、パレスチナがよくて、イスラエルが悪いとか、そうい

う考え方と同じで、無意味だと思うんですね。女性の中でも駄目な人もいっぱいいるし、男性の中でも問題意識をもって、がんばっている人もたくさんいるし、それに男性を産むのは女性ですよ。それを考えると、今までの男性中心の秩序の中で女性性というものを、もっと取り入れてこれなかったのが問題だと思う。本能的に種を殺さず存続させていこうという単純なことですよ。だから武器を取らない、戦争はダメだ、そういう考え方、女性性というものを男性の中にもっと植えつけていくのは、お母さんである女性がもっとできることだと思う。女性はいいんだ、男性は駄目だという考え方よりも、もっと女性性を男性の中に取りこんでいくには、どうすればいいか、そういうことを考えていったほうがいいと思う。

辻 私はちょっと違って、女性として母性本能があるかどうかということではなくて、さっき斎藤さんがおっしゃられたように、生活に密着しているということに注目したいと思う。女性の視点から世界を見て発言

していくことは押さえつけられた下からの視点につながってくると思うんです。女性っていうのは、今はだいぶ変わってきましたけど、やっぱり男性から支配しつけられたという歴史があったし、そういうことから女性の視点というのが、経済的に苦しい人とか、障害者とか、そういう弱者の視点につながるというのが大事だと思うんです。女性という時にそういうところまで、つなげたほうがいいと思う。

女N 今、女性と男性の考え方の違い、それをまた二通りに大きく分けては問題なんですけど、あえて言いますと、これもテレビの番組になりますけど、すごく印象に残っている話があります。「戦争に反対している人は、判断を伴った賛成・反対ではなくて、好きか嫌いかという、そういう感情論で、声高に反対運動を展開しているのではないか」と、学者のような人が言っていたわけです。司会者もそれに同調して、「ほんとにまあ、女、子どもは……困ったもんですね」っていう雰囲気だったんですね。で、今、斎藤さんも皮膚感

覚で、みたいなことをおっしゃいましたけども、やっぱり男性、女性を問わず、そのあたりで本当にいやなのか、いいのか、人間らしい生活とか言ってますけど、自分が解放されるのか、押さえつけられるのか、それが心地いいのか、悪いのかというところで、そこを判断の基準にしていけることが、すごく今、大事だなんて思っています。ただそれを言っていくときに、単なる母性とか言っていくことはちょっと危険。やっぱり事実認識とか、関係性とかにどれだけ裏打ちされて、また感情を大事にしていけるかというところが、勝負だなと思ってるんです。

でも私自身、他人と話をしていて、「でも侵略されているクウェートもほっといいのか」と言われると「そうよね……」ってこうなってしまう部分もあるんですね。じゃ、どこがどうつながって、どうだからこうなんだっていうことを、きちんと自分の中に作っていくことが大事だということを本当に改めて思ってますけど。

「へあごら」に署名活動の用紙がまわってきて、それを見た時に、ふだん、反対だといろいろ思ってるわけですけど、自分自身が何を行動していたかなということとを、すごく突きつけられた気がした。気持ちとしては反対だったし、こんなことがあってはいけないと思っていたけれど、何もしてない自分がいた。ちょっとしたことでもいいから行動につなげていくということのギャップですね。それと、自分の中に考え方をつくっていく、自分だけじゃなく、他人と一緒に共通理解しながら作っていくという、そういう取り組みこそが、一歩一歩として、大事なことなんじゃないか、と。それをテーマに関連して考え合っていきたいと思います。

女F 今までと関連した話ですすめますと、アニメ、アニメスというのがあって、私は現実問題として思うのは、母親ががんばって男の子に女性性を植え付けるのではなくて、男の中にも女の中にも、男と女、両方あるわけで、両方が調和をとって、抑制されずに、気

持ちよく出せればいいんですけど。今の話の関連でいえば、私なんか保守的なところに自己規制しながら生きてきますと、ほんとうは、自分は何がしたいのか、何が自分に心地いいかということを、自分の皮膚感覚にごまかし続けて、わからなくなるという部分すらあるんですよ。男の人で、自分に自信がないと、逆に、俺は強い人だと思ひ込むのかもしれない。わが子は、男の子であれ、女の子であれ、弱い人間には育てたくない。

湾岸戦争後の世界新秩序ということで言えば、従来のように冷戦状態だと、ブッシュが勝手に国連を、安保理事会を、アメリカの非常に独断的な利害でおしすすめるなんてことはできなかったでしょう。ゴルバチョフと仲良くなっていなければ、向こうに気をつかって、もう少し、違う力が働いたかもしれない。次の抑制力が出来上がってないために混乱をひきおこしているんじゃないかという点もありますよね。本当の意味での芯の強さがないと、戦争に走る、犯罪に走る。強

い人が犯罪者になるんじゃない。弱い人間が犯罪者になるんだと、そのことを言いたい気がするんです。

田宮 男性に女性性を植えつけろというのじゃなくて、もともと男性の中にも、そういう気持ちというものがあるから、それをもっと育めないかと思います。女性も抑圧されているように、男性も抑圧されているわけだから……。

## 「女は平和愛好者」

### といつ演出

田宮 イラクでの戦争が起こって、この問題について、それじゃもっと、まわりに目を向けてみる、レバノンではこうだなどと問題はいっぱいあるんだ、一つのことでだけ問題じゃないんだっていう無力感に陥ってきますよね。一つのことでもこれだけ話も分かれるし、ほんとの解決っていうのもよくわからないのに、これだけ問題が山積みにあって、それがすべてシステムの

中に組み込まれていて、いったい、わたしたちに何ができるんだっていう、さっきの文明論の話とか、人間の本能の話とか、ほんとにいろんなことが、かわってきて、いったいどうすればいいのか、具体的には何ができるのか。それを皆さんに言っていたきたい。

しま 先程、国の話が出た時に、国境云々、線引きが変だって話がありましたね。ファミリーで考えれば、家族のまわりをぼかしてゆく。いろんな種類の子どもが入ってきたとか、そういうことを重ねて考えれば、国境の問題は身近に置き換えて考えられる。もう一つ言いたかったのは、たとえば、女は戦争嫌い、平和愛好者だと言われるとしたら、それは演出だと思うんですね。女たちが、歴史の中で、そういう演出を苦々しい思いをしながら、女だから平和愛好者と限らないけれど、そう言わなければならぬ時代だという意識が大事で、自分がやっていることを絶対だと思っているわけじゃない。ですから、西側には、情報操作があるんですけど、こちらには企画があるんですね。その

迎も批判をし合いながら考えないといけませんね。

田宮 私自身思ったのは、女だから平和愛好者というのではなくて、人間だから本当はみんな戦争はいやなんだと思うんですね。人間だから死ぬのは絶対いやだと思うんです。そういう次元でものを考えてみると、どうしたら戦争がなくなるのか、みんな友達になっただいいんだ、そうした単純なことを忘れている。家族感覚で他人のことを考えられるという意識が大事だと思ったんですが、それが遠くにいるとわからない。アラブのことも見えてこない。バクダッドに入ってみて、みんな同じ人間で誰も戦争なんかしたくないし、死にたくないということを感じたわけなんです。逆にいうと国というものが全然私たち民衆の、ピープルの心を反映してくれない。そういった時にいったい何が戦争を止められるかというと、基本的なところでみんなが平和を望んでいる、戦争をしたくない人はいっぱいいると思うし、イスラエルの中にも、ああいう状態はおかしいと思っている人がいると思うんですね。そう

いう基本的なところを、ネットワーク的につなげていけないか、そういうので新しい秩序を作っていけないか。国とかを越えて、そういう人たちの集まりが平和勢力にならないかと思うんですけど、抽象論でしょうか。

しま きわめて具体的なんじゃないですか。たとえばアメリカ人といった場合、ブッシュに代表されるアメリカ人と友達になる可能性のある一人のアメリカ人は全然いっしょにできない。

女O 言葉として、女性性って抽象的でわかりにくいと思うけど、少なくとも日本の中では、女性が参政権を得て、その票が社会的な構造につながってきているのは、やっとこのごろだという感じを、個人の生活の中では受けているんです。そういう意味で、社会参加ができるようになった新しい大人が女性だと思うのね。男性のいろいろな失敗の形態も見た、もっと進んだ女性、いわゆる先進国の女性の失敗も見てきた、日本の新しい社会人としての女性の聡明な活躍はこれか

らの糸口になると思うんです。

女性性っていう言葉で言われたのは、劣性化されているというか、さっき言われた弱者のほうだったと思うので、劣性の人を引き上げながら、これからやれることはいっぱいあるんだ、という思いを言いたいんです。

アメリカで戦争に参加した女性がいても、その人の意見は、確かにその人個人のちゃんとした意見かもしれない。女性が本質的に反戦的であるというのは、私たちの甘い幻想であつたかもしれない、と、湾岸戦争の女性兵士のことでは、自分自身で女性という存在を反省しました。

## 戦争をつくる影の力、

### 女性・経済問題も重要

ミナイ（トルコ系アメリカ人） 女性は本質的に戦争反対か。女性としては、本質的には反対だと思います。

アメリカでは、九八％がブッシュを支持していたって言われてましたけど、八月からずっと、プロパガンダが強く激しかったんですよ。ですから、反対意見を言えない状態になっていたんです。日本の第二次世界大戦中と同じように。

報道は誰がコントロールしているかっていうと……ユダヤ人がコントロールしているんです。だから普通の人がアラブを支持しているって言えない状態になっているんですね。それを考えなければならぬと思います。

日本に流れた情報は、ほとんど、アメリカを通してきたんです。直接入ってきた情報は、ほとんどないんです。それで全世界が戦争を支持しているという話になった。この戦争を支持したのはたった二十八か国だと思えます。もちろん、戦争反対の人々のほうがずっと多かったです。というのは第三世界の人々のほうが先進国の人々より多いんですから、それを忘れないでください。

田宮 尋ねたいんですけど、アメリカでは、ユダヤ人が報道をコントロールしているっていう考え方が私はわからないんです。具体的にどういう形でコントロールされているのか、聞かないと、一概に信じられないんです。

ミナイ イスラエルがつくられた歴史を知らないといわらないと思います。イスラエルがつくられる前に、パレスチナは、オスマン帝国の一部でした。その地域に石油があるということは、第一次世界大戦前に、イギリス人、フランス人、アメリカ人にはわかっていました。石油がなければ、軍隊を維持できない。世界の産業を維持できない。ですから、どうしても、石油の国々を手に入れなければならないという考えがあったんです。アラビアのローレンスとか、かっこいい人たちの話があるんですが、実際には彼らは、いろんな部族のチーフの間に入っていった結局はイギリスやフランスの利益のために働いたんです。

田宮 私としては、民族の対立っていったことで考え

たくないんですね。ユダヤが報道を仕切ってるかもしれないけど、石油が必要なインダストリーの国が仕切っているって考えたほうがいい。ユダヤが仕切っている報道としないほうがいいんじゃないか……。

ミナイ それはね、ちょっと、そんな簡単には考えられないんです。中東といえば、複雑な歴史があって、しかも遊牧民ですから。遊牧民があっちこっち流れていて、国という意識は、あとで押しつけられた考え方なんです。今のオマーンとか、クウェートとか、バレーンとか、そんな国々はほとんどある部族のチーフを国の代表にして、ひとつの国としたんです。そうやって、全部の部族チーフに分けたら、中東は、ほとんど、小さい国になってしましますよね。昔のイタリアと同じように、昔の日本の藩と同じように。もちろん実際には、アラブ世界では、いろいろな紛争があったんですが、遊牧民には国境意識はなく、戦いもなかったんです。オスマン時代でも、もちろんトルコ人が支配していたんですけど、遊牧民は自分たちの文化、自



分たちの生き方を守って生きてきたんです。ほかの文化を押しつけられたことはなかったんです。

それが第二次大戦でオスマンが敗れてから全部植民地になってしまった。その一方、シオニズム運動が一九〇〇年くらいから始まった。イギリスは自分の国のユダヤ人問題を解決するために、パレスチナにユダヤの国をつくることを約束しました。その前にパレスチナ人にオスマンと戦えばパレスチナを独立させると約束していたのに二重手形を振り出したわけです。そして第二次大戦でユダヤ人が恐ろしいめに会ったからと言って、パレスチナに国をつくった。ユダヤ人は第二次大戦中、難民としてアメリカに多く来たとし、アメリカと深い関わりを持った。いまイスラエルを支持しているのはアメリカなんです。国としても支持していますし、アメリカ人としても多くの人が支持しています。アメリカにはいろいろなグループもありますけど、湾岸戦争の時も、アラビア人はいろいろいじめられてたんです。でも、そういう報道は入らなかった。

斎藤 今、おっしゃったこと、「ユダヤ人」っていう言い方をしたら、わかりにくくなるんじゃないですか。シオニズムが支配的になった、って言ったほうがわかりやすい。

ミナイ 自分の民族を支持するのは、あたりまえだと思います。アメリカにはユダヤ人が多い。お金もある、力もある。

斎藤 アラブの人たちが言っていたのは、世界のマスメディアもシオニストが支配している。権力の中枢のところにもたくさんいて、結局彼らの思うままになっている。これは伝聞で本当かどうかわかりませんが、そういうふうにはアラビア人が感じる状況があるのか、ないのか。

ミナイ シオニストが支配しているというのは確かどうかわかりませんが、ある西洋の先進国が支配しているのは確かだと思います。

男A ユダヤ人とシオニストは、分けないといけないと思うんです。日本も言論がものすごく操作されてま

すけど、アメリカでも存じのように、モルガン財団とロックフェラー財団の二大財団がほとんど力を持っていて、そのほか七つの財団があらゆるものに権限を持っている国ですから、アメリカの現在の経済権益を握る人たちの中心的な世論がシオニスト運動を支持している。だから言論もそういう傾向に傾く。日本だって、今は財閥が明確じゃないようにみえるけれど、要するに七大銀行中心の経済界に有利でない言論は、すべてシャットアウトされるっていうのが原則でしょ。民衆の支持する意見はマスコミの中のわずか数行で伝わっていくだけで、決して中心にならない。今度もCNNのアーネスト記者が事態を伝えたくらいで、ほとんど、サウジのアメリカのセンタールで情報がコントロールされて世界中にばらまかれた。記者だけでも二十何人逮捕されましたよね。アメリカ国内でも、反戦運動や徴兵の拒否をして監獄に入れられた人がかなりの数います。そういうのは、チラッ、チラッとしか出ない。大事だったのは、スペインのマドリッドで二十

万人がデモをしましたよね。西側でも、スペインの民衆レベルで戦いへの姿勢が組織されていたわけです。それが、日本ではできなかった。ドイツでもものすごいデモがありました。日本は安保時代と違って、体制側にとっては、やりやすい時代になっている。野党が全くダメになってしまっているからです。せっかくイラクに行かれたんですから、イラクの草の根運動、イラクの民衆と本当にリンケージして、連絡をとりあえる運動をこれから育てていく必要があると思います。それから、男と女の議論が先程出ましたが、力より経済の自立が大切だと思うんです。今度の戦争もアメリカが何のためにやったかという、アメリカが非常に貧しかったから、他から金を借りてまで戦争をやったわけです。経済記事を読むとよくわかりますが、今もアメリカの実体は、失業者がたくさん出て、IBMも千人解雇したりしている。銀行の倒産も相次ぐなど経済的には大変な状況にある。金がなくなっただけで、戦争をやった。しかもクウェートの戦後処理でもアメ

リカが復興事業の九〇％以上請け負う。やはり金のために戦争をやったんだという面を私は強く感じてるんです。衛星放送を見ていても、フランスのニュースを見ると、フランスの会社がクウェートでいくら契約がとれたとかいう報道が出る。とれないと突き上げられる。金のための戦争が行われる。そこが重要な気がしています。

## 国民の一人ひとりの

### 個人的な反戦活動こそ

#### 戦争を阻止する

しま 今おっしゃった金と戦争の関わりの問題は、私たち一人一人にとって、自分の生活信条を、いったいこれは何なんだという視点に引き出さないとダメだと思っただけですけれど。そのお話に入る前にバーバラさんがおいでになりましたので、お話を聞きましょう。彼女は十年以上、日本に住んでおられるんですが……先

程、アメリカのフェミニストは戦争を肯定したんじゃないかというご意見が出ましたね。その意見についてバーバラさん、ひとこと何かお話しくださいますか。バーバラ（英国系アメリカ人） 遅れてきて申しわけありません。参加させて頂いてよろこんでいます。私はアメリカ人ですけど、個人の意見としてお話ししたい。六〇年代に反戦デモにフェミニストが参加しましたが、その時代は、アメリカ帝国主義という言葉がよく聞かれました。アメリカは、やっぱり世界を支配したいと思ってるんですね。メキシコとアメリカの関係をみてわかる。一八二二年からのモンロー・ドクトリンで、北アメリカは、南米と中米を支配する権利があると言ってきました。この戦争を始めた去年の八月に、私は六〇年代のことをいろいろ思い出しました。男性女性の問題が出ました。女性は戦争したくないけど、男性は戦争をとおして男らしさを示そうとするとか結構議論がありました。私の娘に電話して聞いたら「今晚大きい反戦デモがありますよ、きっと地上戦は

やらないでしょう。ブッシュ大統領に「反対している人多いんですよ。学生はほとんど反対してますよ」って言っていましたよ。この戦争の理由をアメリカは「自由を守るため」って言ってますが、ベトナム戦争も同じでした。それは「中心になっている階級としての男性の自由を守るため」なんですよね。「アメリカの大企業の自由、資本主義の自由を守るため」です。中東の歴史を私たちはもっと理解しなきゃダメだと思いますけど、アメリカは世界を支配したいのだということをお忘れなくとも大切です。

中東の問題は石油との関係も強いでしょう。たとえば「クウェートを守るために」は、アメリカの「石油を守るために」です。クウェートは石油を輸出する国だから守る。もしクウェートがブッシュの大嫌いな野菜、ブロッコリーを輸出する国だったら、守る必要はないんですね（笑）。クウェートはブロッコリーではない石油を輸出している。石油はアメリカの生活、生き方そのものです。そこを見なければいけない。それに

もちろん日本の政府も賛成している。でも政府と国民は違いますね。日本でもアメリカでも。本当にこの戦争を賛成しているアメリカ人と反対しているアメリカ人と、どっちが多いかということは、はっきり言えないと思います。私の家族、私の友人、みんなこの戦争に反対しました。でもマスコミは賛成しか伝えないんです。真実はわからないのかもしれない。

これからどうするかということをお考えと、さっきの女性、男性の役割という話も、個人個人で考えた。組織やネットワークをつくって政府を圧迫しても、活動的なことをやらなきゃダメです。私の夢は、差別のない国境のない世界をつくることです。食べ物無理しないで生きられる世界をつくりたい。

どういうふうにつくりますか？ 私は教師ですから、授業で戦争をテーマにし、性役割の問題を話さなくては行けない。もし会社勤めしたら、自分の会社は何をつくらっているのか、政府とどう関わっているのかを、もっと研究して、組合としても考えなければならぬ。

労働者は労働組合で経済的な問題よりも階級のギャップや性役割のギャップをもっと話し合って考えることを提案したいですね。主婦だったら、自分の子どもに教えずにちゃいけな。わたしたちは自分個人の役割として活動したい。

日本は今度の戦争中、自衛隊を派遣したがったけどできなかったでしょ、なぜか？これを学生に話したら、多くの学生が、「でもわたしたちは何もできなかった」って言いました。「でもね、自衛隊を派遣できなかったでしょう、なぜ？」と聞いたら「うーん、野党の関係かなァ」とか、でも一人の学生は「国民が反対したから」と言いました。本当にそうなんですよ。ベトナム戦争中でも反戦デモに参加した人が多かった。もしこれが増えていなかったら、「核兵器を使っただけだ」と言った学者も結構いました。だから、国民の反対こそ大事、これからがんばらなくてはいけないと思いますね。

私は長く日本に住んでいるから、わたしは日本人で

はないけれど日本語人ですね。日本語あまりうまくないけれど、今ここに住んで日本語で暮らしているから日本語人です。ここは私の国です。アメリカも私の国です。だから、「ひとつの地球へ」の運動をどうしたらつくれるのか、今、考えているんです。

アメリカ人は、とにかく支配したい。フェミニスト運動でも、支配したいリーダーも結構います。

女Q はじめてこういうところで発言するんですけれど、……湾岸戦争が始まった時に、たまたま私はアメリカにいたんです。バーバラさんは、国民はずいぶん反対したっておっしゃいましたが、私のまわりの人たちはほとんど、皆、賛成だったんです。もう完璧に。

恐らくバーバラさんの知り合いはインテリだと思えます。一般市民は、ほとんど賛成。それは、まず情報が入っていないということ、偏った情報のみです。先程の高校生の手紙のようにマスコミをもっと利用できるんじゃないか、未来に向けて変えなくちゃいけない。情報が全く一般人に入っていないんです。

女R お話伺って、ひとつ気がついたことがあるんです。アメリカの反戦運動が見えない、じゃ、日本の反戦運動はアジアとか第三世界に見えているんだろうか。掃海艇がフィリピンとか各地に立ち寄って行きますよね。それを受け止める民衆の気持ちというのは、あ、日本は戦争に賛成したんだ、日本の良心的な部分は屈服したんだ、と思うかもしれない。アメリカの反戦運動が見える、見えないじゃなくて、自分とアジア、自分と第三世界、自分とヨーロッパとの関係で見たい。自分の国の反戦運動が世界に伝わっているのか、という根本をなくして話したら、単なる世間話に終わってしまう。国家は情報の権利を握っているから国家なんです。だから国家レベルじゃなく、それぞれの国の良心的な部分のネットワークをつくっていくしかない。政府とは別の立場で、国益論に、戦争に、はっきり反対している人が現実いるんだということを、日本人としてどうやって世界に知らせられるか。そのあたりを具体的に外国の方も交えて話したい。

男性B 先日、湾岸戦争の始まる前のアメリカのビデオを見せてもらう機会が、あったんです。アメリカに「ペーパータイガー」、張り子のトラっていう有線テレビのプロダクションがあるんだそうです。権力はあるけど吹けば飛ぶようなという、やや左翼路線の局なんですけど、一本三十分で五巻つくっているのを見せてもらいました。そこには反戦運動の場面がずいぶん出てくるんですね。アメリカの反戦をテーマにして、それだけをかき集めているから、周りには違うのもあるんでしょうけど、アメリカの国民がきちっと反戦を市民運動としてやった面もあったんだなあと感じました。もしペーパータイガーがこのフィルムをとっていなかったら、伝達できなかったことですよ。私は感銘して見たんですけど。なぜ自分たちが反戦運動をするのかということが三時間ぐらいのルポにして映像化されている。戦争を引き起こすな、というコメントがしっかり入っている。私はフリーのカメラマンやっているの、よけいそのショックは大きかったです。日

本では憲法論争などテレビ局がやりましたが、もっと  
ビジュアルなものをぼくらがとれなかったのか。そう  
いうものがあれば、アジアの人たちにも見せることが  
できたのにと、責任さえ感じています。自分がたば  
んやり行く末を見守って流されたという恥ずかしい思  
いをしました。

私は、沖縄復帰の二、三年前から二十年くらいずつ  
と沖縄をカメラをとおして追っていて、ベトナム戦争  
もちよっと行きました。そのとき、つくづく情報操作  
のことに感じました。サイゴンが陥落する直前になる  
と、全くうわさとしてしか入ってこない情報におどら  
されて日本のジャーナリスト、大新聞、大放送局の人  
たちが、どんどん引き揚げていくわけです。外国の人  
は頑張ってるんですが、ひどい人になると、某有名新  
聞社の人なんか、サイゴンの中で自分が襲われないよ  
うに、リュックに日の丸を張り付けて帰って行く。三  
十日が陥落ですが、二十七、八日頃浮足立って帰った。  
記者も大変センサーショナルにうわさで書く。プノン

ペンの陥落は、四月十七日頃だったと思うんですが、  
四月一日頃には、各紙、いっせいに、もうプノンペン  
は人間がいるところじゃない、というような書き出し  
で、日本のジャーナリストが、わっと逃げてしまった。  
しかし僕の友人のカメラマンは、しろうとでしただけ  
ががんばって『プノンペン陥落』という二本のフィルム  
をきちんと撮りました。それは大変世界的な記録だ  
ったと思います。でも一般のマスコミは、本社の指令  
なんでしょうけど、真実をつかまらず逃げ腰になった。  
私も含めて、情けないぞ日本人、という感じでした。  
しかも帰ってきてフリーの人で、少しでもがんばって  
見届けた人は、ほとんどテレビ局に呼ばれない。チヨ  
ボチヨボ、集会で語るけれど、戦争の真実は多くの  
人々に伝えるににくい。マスコミの選択がパブリックのため  
にあるのでなく、自分たちの名誉というレベルで判断  
して切り捨てることを自分の体験で知りました。

もうひとつ、石垣の白保の問題、空港反対問題をフ  
ォローしていますが、本当は十年くらい前にこの巨大

空港は完成していたんですね。それを白保の人たちががんばって、何とか十二年もちこたえてるんです。もしも十年前にできていたら、二千五百メートルの滑走路が日本の最南端にできたわけで、これは有事に使える。戦争のたびに使われる可能性は十分出てくる。これをつくらせないことは、サンゴを守る、島の暮らしを守るためであるけれど、リゾート開発と戦争がリンクしている面があると思う。僕たちがどういうライフスタイルをつくっていくかは、儲かるか儲からないかの計算と同時に、リゾートをつくらないほうが豊かになれるという具体例を出さなきゃいけない。経済の構造まで出して説得できる話をふやしていくことが平和の方向に結び付いていくと思います。

## 人と人との文化的交流も

### 深めよう

田宮 お二人の話から、マスコミの持つ力と、私たち

が未来のネットワークを作ることが、どんなに大切な、確認したような気がしています。これだけ情報があふれているのに、戦争を阻む情報は流せなかった。人と人をつなぐ人間の素顔をマスコミが流してくれなかった。

それじゃ、日本の中で反戦運動のあったことを知らせながら、未来に向けてネットワークをつくっていくにはどうしたらいいのか。ネットワークはつくれると思うんですが、ただ情報を流すだけじゃなくて戦争を阻止できる力を持つようなネットワークは可能だろうか……。それが可能じゃないのかと、この頃思いはじめた。たとえば環境問題に取り組んでいる人たちが、最近「国際環境法」をつくらうって言い始めている。自民党とか社会党とかに関係なく、同じ考えの人が結び合って、世界に広げていこうとしている。このやり方でやれば、もし、不幸なことに将来、戦争への選択を迫られたような時に、私たちも武器をとらないという「法」を持つぐらいのネットワークづくりができる



かもしれない。同時に、わたしたちの気持ちが反映される政府をつくっていくという、両方向でやらないといけない。私は未来に向けて、そのどちらもできるんじゃないかと思っています。

辻 皆さんの話を伺っていると、すごく希望が持てるんですが、私は今、大学院生ですが、学内で一人ぼっちで、絶望的な気持ちになることがあるんです。自分たちが研究していることと、現実の問題が全く結びついていない感じがある。もし戦争が阻止できないなら、何のために勉強しているんだろうと、憤りを感じるんです。私は平和を作り出していく活動としての研究をしています。文学や芸術が専攻なので、全く違うように見えるんですけど、今回の戦争でも、もし、アラブの文化とか芸術とかが紹介される場所があって、向こうの人たちの人間としての姿がもう少しでもわかっていけば、マスコミの情報に流されなかったかもしれない。普通の人間関係でも、ある人の悪口を聞いても、その人を少しでも理解していれば、「いや、それは少

し違うんじゃないの」って言えますよね。だから互いの理解を深める息の長い活動をこれからずっと、細く、長く、日常的にやっていきたい。

マスコミに関して思ったのは、私もアラビア語はできないんですが、イラクに行った報道関係の人たちがアラビア語を話せない人たちだったようです。英語の情報だけ聞いて情報を流したなんて本当におかしい。文化と政治は一見、関わりないと思ってる人が多いようですけど、文化が政治的に支配されていることが問題なんだって、今、考えているんです。

斎藤 今の辻さんの発言に関連しますが、最近、私たちは『太陽の男たち』っていうアラブの映画を見たんです。とてもいい映画でした。パレスチナの問題を扱っているんですが、影像の持つ迫力でアラブの民衆が持っている問題が、直接伝わってくる。そういう映画があることも私たちは、知らなかった。戦争中、こういうのがテレビで放映されていたら、日本人の気持ちは随分変わっていたかもしれないと思いました。

文化交流は政治や外交の第一歩ですね。私は実は一九七五年から、世界女性会議に三回参加して、NGOの女性たちと交流を持って、潜在的なネットワークづくりの基本ができたかと思っていたんですが、そういうところへ出てくるのは、残念ながら第三世界の人はほとんどいない。お金がないから出てこれないんです。一九八〇年の時はコペンハーゲンでしたから、かなりアラブの人も来ていましたが、政府の会議には出てもNGOには出てこない。ただPLOの人がNGOの会議で口を開きかけたことがあったんです。しかしその人が口を開きかけた途端に、白人の女性たちが、七、八人総立ちになって、「出る！ 出る！」と、つまみだしてしまった。発言中なのにマイクの電源を切ったんです。私はフェミニストの会議なのにと本当に驚きましたが、PLOと聞くだけでテロリストというレッテルをはっていく世界がある。あの人も同じ人間、同じ女だと信じ合える文化的交流が必要だと思つづく思いました。

政府間会議には、政府代表のアラブの人も日本人も参加していたんですが、日本の代表たちは、イラクやイランの人たちを「黒いカラス」って言っていました。黒いベールをかぶっているということで接触しようとしなかった。ベールは中東では太陽や砂ぼこりから身を守る必要品、文化なのに。せめてNGOで何らかのコンタクトをとっていれば、女たちが手を結んで戦争を停める方法をさぐれたのではないか、今回は、私たち、向こうの普通の女の人たちと心ひらいて話し合えるなって本当に感じただけに反省しています。

世界の平和運動をやっている人たちとも交流はあったんですが、たとえばサウジの国境二キロのところにピーステントを張っていたなんてことは知らなかった。女たちで人間のクサリを国境に張るしかないね、ってよく話していたんですが、そういう情報がもし伝わっていたら、世界から多くの人がかけつけたんじゃないかと思うんです。また停戦後、日本オリエント学会の偉い方に「オリエント学会は傍観してたけど」って聞

きましたら、「実は非常に心配していた。ウルなど貴重な遺跡がずいぶん破壊されたようで、国際オリエント学会でも問題にしていた」っていうんです。国際オリエント学会がなぜ立ち上がらなかったのか、さっき田中さんのおっしゃった話の中にヒントがあったと思うんですが、「願望をインプットしたから」じゃないかって思います。ものごとを判断する時に、願望もインプットしたら、アウトプットは必ず狂ってくる。もっとシビアに、諸々の本質を見抜く眼力をふだんからつくっておかないと、どんなにネットワークを組んでいたつもりでも砂上の楼閣にすぎないんじゃないでしょうか。

## 教科書に『侵略』が

ないのなら、

親が教えよう

女P 私は今度の戦争に関心をもって何かに参加した

いって思いながらも、何もしないできたんです。

今回この会があるのを知って初めて参加し、どういう活動をしているのか、大体わかったつもりなんです。今日のテーマである、「未来へ」っていうのがまだ抜けているような気がするんです。私たちがこれからどういうふうに具体的に何をしたいか、どうやって手をつないでいくか、っていうのがキーポイントですよ。アラブ諸国の人たちは、どういう形で日本人たちの支援を望んでいるかというのをもっとつきつめて、これからの運動の形とか色とかが見えてこなくちゃいけない時期だと思うんです。一人ひとりの意見を聞いて具体的な案を出していったらどうかなと思うんですけれど。

ミナイ 湾岸戦争のとき、いろいろな人に聞いて反応をみたんです。非常に印象的だったのは、二十―三十代の人たち、これからの時代を担う人たちです。男性は戦争についてはいっさい関心を持っていなかった。関心を持っている人たちは、第二次世界大戦を経験し

た人か、もっと若い十代の人たちなんですね。二十―三十代の人たちは、リゾートとか株とかばかり考えている。もし戦争になったらその人たちが真っ先に犠牲者になるのに、そういう意識は全くなかったんです。「私たちは戦争を経験していないからわからない」っていうんです。戦争っていうのは、経験していなくてもわかるべきです。「痛い」ってことをわかるべき。それなのに「経験していないからわからない」って言うこと自体驚きました。何の同情感もない。この人たちの親はだいたい五十代でしょ。親たちは一体、何してきたのか？ 経済成長だけを追いかけて、子どもたちにはいっさい価値観を教えてない。そういうことは、学校にまかせている。学校はそんなことをする所じゃないです。私も教師ですが、価値観を教えるのは教師の義務じゃないです。教師は情報を与える。どんな情報があるかを正確に教える。価値観や人間性は親の背中を見て育つものです。親たちは何をしてきたのか？ 確かに企業戦士として一所懸命働いているわけです

けど、それが汚染をつくっている。たとえば白保の空港をつくりたがる男たち。若者を育てている大人たちが問題です。私たちが問題です。自分の行為をとおして、モラルを示さなきゃいけない。便利な生き方だけを追って全国をゴミ畑にしてはダメです。東京のゴミを地方にもっていくなんて、自分のトイレを使わないで、隣でおしっこするのと同じです。戦争や環境破壊を止めるのには、私たち個人が、自分の生き方を見直さなくちゃダメです。どうして今の収入じゃ足りないの？ 十階建てにしくちゃどうしていけないの？ それらはみんな石油が必要です。だから戦争が起きる。自分の生き方を見直さないと限りまた起きます。必要ないと思ったものは減らさなくてはいけない。もしある会社が軍需に参加しているのだったら、絶対にその会社のものは買わない。それが重要だと思います。本当にそれが必要か？ それを考えることが重要です。

女S ミナイさんのお話に私も賛同します。私も環境問題に関心を持っているのですが、日本人は世界の中心

でお金があるからということで、上から下を見て支配している、そんな感じだと思うんですよね。子どもは親の姿を見て育つのは確かです。小二の子どもがいまですが塾やおけいこに通わせないようにしています。でも周りの親は受験戦争で子どもを塾に追いやっている。何を私たちがやっていくのか：まず子どもたちにモラルを伝える。一人ひとりの意識がとても大切だと思います。二十年前にドイツに二年半ほどいたことがあるんですが、友情の家という所で自給自足しながら、平和について学んだり共同作業をしたりしたことがあります。アメリカとかアフリカとかいろいろな国の人たちがいて、私は大学を出た直後にそこに行ったんですが、今、考えると、生活を共有しながら、直接、その国のその人たちの歴史や情報にふれられる場所だったような気がします。

イラクの人、パレスチナの人のことなど今回の戦争中全くわからないままでしたので、その場所にいけばアラブの人の情報が聞かれるというところが、日本に

もあっていいと思うんです。この〈へあごら〉の会は、毎日新聞で知ったんですが、この会自体も、もっとアピールする必要がある。それを知って、賛同する人ももっとふやして、いっしょになって考えて、いろんなものを作り上げることが大切です。

学生はネットワークづくりを、主婦は子どもの教育を、それぞれの立場で、どんどんやっていかなければならない。そういう時につきあたるのは、たとえば私が一人でPTAで発言しても、浮き上がってしまうんですね。みんな、今さら、っていうような顔をされるんですけど、こういう〈へあごら〉の会のようなのがあって、一月に一回勉強会があると、それが刺激になって、私は、一人でもやっぱりやろう、っていう気になれる。だから勉強会をして学習し合いながら、感性をマヒさせないようにしたいですね。

ミナイ 私は日本を批判したわけではなく、世界中、アメリカに行ってもヨーロッパに行っても一般に若者が社会問題に無関心になっていきますね、七〇年代、八〇

年代に比べると。韓国は別ですけど。韓国ではいま学生運動をしている。日本の学生はそれをテレビで見て、何、この人たちがバカげたことをやっていると言う。私は韓国の学生を応援すべきだと思うんですよ。二十歳の学生がプロテストして焼身自殺したいっていう気持ちに追いつめられているってことは、大人がつくった社会が苦しいってことでしょ。国籍に関係なく、そんな社会を私たちがつくっているということは、恥ずかしい。これは韓国だけの問題じゃないんです。学校でどんな価値観を教えているのか、もっと知らなければいけない。学校は国が指導しているものです。先生としても発言の自由がない。もらった教科書を使わなければならぬ。学校は洗脳の組織なんです。だから高校卒業してもみんなボーッとしているんです（笑）。女P でも母親が運動をしますと、その人の子どもは意地悪をされます。

ミナイ そうだったら、何人かの親が組織をつくって、それを解決しなくちゃいけない。

女P 私もそれを考えたんです。でも面倒くさいことはイヤという親がたくさんいるんです。賛同してくれる人はほとんどいません。

ミナイ 私も子どもを教えますが、九歳の子は集中力がない。罰を受けても五分後には忘れてます。その九歳の子が私にこう言いました。先生がいきなり来て、ピシャッとやった。その先生は「モミジ先生」って言われてるんですって。つまり、いきなりピシャッとやってモミジの形をつくる。なぜ親が立って、その子を守らないんですかと言うと、親がそういうことをすると、その子がいじめられるからと言われた。私はそれを聞いて驚きました。それが、九歳の子どもに対する先生の行動ですか。それなのに親は、行動すると周りからどうこう言われると言ってブレーキをかける。どうこう言うまわりの親がモミジされたほうがいいのかもしれない（笑）。

子どもの教育は、そんな学校に任せられない、親のすることです。学校は国が作り出した意見を形成して

いくために国がつくった組織なんですから。学校は信用できない。教科書に戦争のことがないんなら、親は自分で教えない。親の責任です。図書館にいったい本があります。私が言っているのは、我々おとなとして、親が実行して、教えないければならない、ってことです。たとえば、環境を守ることを教えたいならば、なぜ紙おむつやわりばしを使うんですか？ 子どもはちゃんと見ているんですよ。便利だから使う、そういう私たちの行為によって天然資源は大事じゃないってことを教えているんです。そういうところに問題があるんじゃないですか。地球を尊重すれば戦争はできないのに。

女Q 今の話を聞いていて、学校と大企業は似ていると思いました（同じだの声）。子どもが洗脳されて、夫も洗脳されていってしまう（笑）。そういう洗脳された人が、戦争に賛成ということになっていく。リゾート開発でも結局企業がトクをする。企業はエコロジーやってますとか、労働時間短縮やってますとか、P

Rするけれども、それは、そうしたほうが企業のイメージアップにつながって得をするからです。そういうふうにして人を集める。そして政府は、政治的な力よりも経済を支配しているものの奴隷になっている。結局お金を持っている人が勝ち、っていう感じがする。さっきもユダヤの資本がアメリカのマスコミを牛耳っているっていう話がありましたけれども、ユダヤ人ではなくパレスチナ人だったら、全然違う構造ができているんじゃないかなと思います。だから、家庭でできることは、夫がスポイルされかかっていたら、何とかそれを家庭で方向転換していくとか、労働組合でできる限りやっていく。でも組合は、めんどくさいことはやりたがらないんですね。関心を持っている人の間ではいろんなことを話せるけれども、一般にはなかなか受け入れられなくなっているって思います。先程のPTAの母親も同じで、みんなめんどくさいこととはやらないで、利益だけは確保して楽に生きたいなって感じがすごく蔓延していて、危機感を覚えます。

これから家庭でも地域でも、時間をかけて、へこたれないで、肩の力を入れすぎないでやっていく。そっちのほうで、じわじわと、変わっていくんじゃないか。企業がエコロジーやってますとPRしたら、それを逆手にとって投書していくとか。

それからネットワークの話が出ましたが、平和とか環境の問題に関心を持っても、どこに行ったらいいのかわからない人がものすごく多いと思うんです。湾岸戦争が始まった時も、はじめのうちは、デモをどこで、いつやっているのかなど、全くわからなかった。何かやらなきゃ、と、あせるけれども、どうしていいかわからない。あとで、テレビ見て、あら遅れてしまったと思ったことがあったんで、なるべく情報を知らせたい。都会では情報は伝わりやすいけれども、たとえば、朝日ジャーナルに、農村の女性にとっては、フェミニズムなんて遠い国の話でしかない、っていう投書が出てましたけど。自分たちの情報を伝えていくメディアが日本中、手軽に手に入れられるようにならないかな、

って思います。

## “自分の行動”が あってこそ連帯ができる

ミナイ どこにデモがあったとか。それを知らせることはあんまり問題じゃないと思います。たとえば、何かに反対でしたら、みんな、電話持ってますね。電話一本で、総理府、公明党、自分でどんどん電話すれば、そっちも、あ、これは大変や、ってね（笑）。そちらの人に話すってことは、その人が変わる。それが大切。私は電話したことありますけど、日本では皆、あまりやりませんね。

自民党に電話したら、若者が出て、非常にボライトなんですよ（笑）。ガチャンと切らなかった。聞いてくれましたよ。でも「あんたの言ってることわからないう」と言う。「戦争が起きたら、あなたが行くのよ」って話したら、少しはわかったみたいでした。そんな



やりとりで自分の意見を相手に知らせれば、相手が変わる。これが大切なことですよ。たくさんの人がそうやって電話すれば、国のほうも変わる。国っていうのは、私たちのこと。私たちが投票したんです。だから、取り戻すことができるんです。私たちが言いなりにならないければ相手も変わらないわけにはいかないんです。バーバラ　話し合うことはすごく大切で、そうやって個人の責任をとってやるわけですけど、教育制度、社会制度の問題は政治的問題ですね。今の会社で勤めている人たちは、会社の奴隷じゃないですか。紙おしめを使っているのは、会社に勤めて時間がない若いお母さんだとすると、その気持ちはわかるんですね。個人の問題でも、話し合うだけじゃなくて、経済的問題、政治的問題として、ネットワークつくって運動つくらないければならないと思います。

田宮　企業は得することしかない。エコロジー問題も、それを扱わないとおいてきぼりをくう。それを企業が受け入れるってことは、人の意識がそこまで高まって

いる、企業に影響を与えるほど力が強くなっているということですよね。いま企業はそういう部門を必ず持ち、企業の中から環境問題を指導してくれる人はいないかって探したりしている。企業と日本の政治とはびったりくっついていきますから、環境問題やらないと政治家がおいてきぼりをくらっちゃう、っていうふうになったのは、上の方で日本を牛耳っているものに影響を与えはじめていることだから、すごくいいことだと思います。

で、ネットワークの問題ですが、今、皆、団体に対して毛嫌いの傾向がありますよね。団体のイデオロギーを押しつけられるのをいやがる。ネットワークのいいところは、自分が賛成できれば、一人でも参加できることですよね。そういう利点をもっと使いたい。エコロジー関係ではこの利点を生かして、企業にまで意識変革を迫っていったと思うんです。戦争反対の問題は、今まで器がなかったから力にならなかったけれども、これから一歩ずつやっていけると思う。世界全

体の反戦ネットワークをつくるなんて夢みたいだと思わないで、私たち一人でもいいから人の結びつきを広げていけばいい。私は「へあごら」と知り合っているいろいろ勉強になったし、だいぶ広がったと思ってるんです。

それからさっき、女が何か行動すると子どもがいじめられる、という話が出ましたが、それはもう、しかたないって言うか、いじめられて強くなるっていうくらいでやらなきゃいけない。私は親に「違うと思うたら違うと言え」って育てられましたから、なんで自分の家だけ違うの、っていう違和感があったんですが、長い目でみたら、親に感謝しています。だから頑張ってください。

辻 私も親が齒に衣を着せないでいろいろ言うので、近所の人の目を感じて、もう少しおだやかに言えたいのになって思ったこともありましたが、今になってみると、それはすごくよかったと思ってます。親がヘナットしてたら、今こんなふうにいるいろいろ考えるかなと思います。

斎藤 そういう基本的な小さい行動こそ大切ですね。

その一方、国際的ネットワークも重要ですが、世界に向けてネットワークをつくっていくときに、日本人にとって言葉のハンディキャップの問題もあります。今度も、湾岸戦争を通じてつくづく思ったんですけれど、母国語が国際語になっている人の発言権がいやおうなしに大きくなって。今日の会も、できればいろんな国の人が母国語で話し合える会にしたかったんですけど、同時通訳をつけると莫大な費用がかかってできなかった。長年考えてることですが、どこの国の言葉からも等距離の、新しい国際語をつくれなものではないでしょうか。エスペラントにしてもヨーロッパの言葉を母体にしてますね。もっと全然違う、たとえばコンピュータにインプットしやすい機械語みたいなものに情緒を盛りこめるような言葉が、何かできないかな、って思っているんです。今のままだと、情報の南北問題は格差が拡大する一方だと思う。その格差を楯に、今回の湾岸戦争は、英語圏が圧倒的な勝利を占めたわけで

す。そのへんもとて大きな課題じゃないでしょうか。バーバラ 英語教育制度のことを少し話したいんです。が、湾岸戦争の終わり頃、ベトナム、タイ、インドネシアに行きました時に、ホーチミン大学で英語教育のワークシヨップやりました。そのとき、学生も先生も皆、英語がよくできました。ベトナム戦争のことや、近代のアメリカ社会のことも、学生はよく質問しましたよ。タイでも、インドネシアでも、中学校出なかった人でも、少し話せる。国際化ということを考えているから、中学生の頃からタイでもインドネシアでも毎日、英語もフランス語も勉強してるんです。アメリカのテレビやラジオもよく聞いています。ベトナムのホーチミン大学の先生は、いつか日本に行って教育学部で勉強したいって言ってましたが、私は、もう、いいでしょう、と言いました(笑)。ベトナムの英語の教育制度のほうが日本よりよかったですね。日本では入学制度が変わらなければダメでしょうね。私の責任、大学の責任、社会の責任、文部省の責任。文部省は爆

発したほうがいいでしょう。爆弾があればどうぞ使ってください(笑)。

女R ネットワークづくりのところで、さっき感情的になっていたので、もう少し厳密に言いたいです。できそうできない、しんどいっていうのは、日本の中で生きているってことは、日本の問題がある。フィリピンはフィリピンの問題があるんですが、それが日本人の一人一人と具体的な問題がからんでいたります。すごく重層的ですよ。その重層的なしがらみを自分の内部に抱え込んで葛藤することも含めてね。そういう覚悟でやっていかないといけないと思う。単純に仲良く手を取り合いますようではすすまない。日本に生まれた宿命ですよ。アジアに対する侵略の経験を持っていて、その構造が現在も全く変わっていない日本。それをまるごと背負ってアジアとの関係、第三世界との関係をやっていくしかない。しがらみごと心で受け止めていかなければならない。それでもネットワークをつくるのはしんどいけど、その国にどんなことがあ

るのか伝え合わないと。やりたいと思います。

田宮 それぞれが多層的な問題をかかえていて、自分にとって気持ちのいいことが他人にとって気持ちのいいことかわからない、ということを言われたと思うんですけど、そういう違う問題を背負っているけれども誰も死にたくない、誰も武器はとりたくないという、そういう選択ができるという基準で、私は人間の良心をまだ信じられるんですね。その部分でネットワークをつくるのが戦争にあらがう力になると考えているんです。私たちはイギリスのNGOの人を呼んで、国際環境法をつくらうっていう運動をやらうとしてるんです。急に宣伝になっちゃいますけど、ビラがありますから読んでください。ネットワークづくりが大きなものにつながっていくことに、皆さん希望を捨てないでやっていきましょうよ。

女R 私の言った意味も、個々人のレベルでなく、ここにいる私が日本国に生きているということ、そういう大枠でひっくりかえって、アジアの一員としてやりたい

ってことなんです。

しま たとえば、現在という時点をとると、AさんとBさんが対立していて、利害関係があるわけですよ。しかし今出て来ている平和の問題は、時間という要素が入って来ている。今すぐ完璧な平和は、絶対に実現できない、しかし、だからこそ運動するので、時間の要素に賭けているわけです。人類皆、平和を願うと観念レベルでいうけれども、実は一部、本気でそう思っていない人もいるわけですね。しかし、そういう人が未来に向けて、どうしたら変わるか、そういうことに私たちが今日どう生きるのかとからめて、今日話し合ったことの意味がわかったような気がします。それでネットワークの問題は、今、あせってすぐにつくる、というのではなくていいんじゃないですか。今まで考えていた、またつくられているネットワークとはもう一味違うものにしたいいし、何かあった時に力を出せるネットワークを考えていきたい。ふだんはむしろまとまらないで、個々に動いているほうがいい。今た

くさんあるネットワークの点線を皆で描いてみようじゃないか、そんなイメージではないかと思うんです。今日の集会でこんなアイデアが出たから、すぐにという期待を、私は持っていないんですけど、皆さんは、いかがでしょうか。……で、とても残念ですが、もう時間が迫っていますので、あと十分ほど、結論は出す必要はないと思いますので、点線のネットワークのアイデアのようなものについて、おっしゃりたいことありませんか。

男C 日本にいらっしゃるPLOの方の話なんか聞いて、違う論理があることを感じてきました。今日は、イラクとかイスラエルの人たちの声をじかに聞きたくて伺ったんですが、そういう方から、もっと声を聞くチャンスを持ちたいと思います。双方の論理を聞いて、それを判断するのが民衆の論理だと思うんです。サダム・フセインやアラファト議長を独裁者というふうに一方的に否定するんじゃないく、アラブの中ではそれぞれの時代にいろんな見方がある。多様なオピニオンを

知る必要がある。指導者には独裁的な面がでてくることもありうるし、民衆にそう映る、そういう中に国がある、ということを感じていますので、やはり西側ばかりでなく、アラブのじかの情報をもっと学習することがいいと思うんですけど。

斎藤 戦争防止について。私は、やはり、戦場の第一歩は日本にあると思います。もちろん世界に発信することも大切ですけど、日本の国民と、それを代表するはずの政府とのこれほどの大きな隔たりを、どう解決していくかっていうことを、本当に一所懸命やらなきゃならないと思います。日本の基地の七五％が沖縄に集中していることを、ほとんどの人は日常的に忘れている。先程も、国土の返還っていうならばまず基地を返還してほしいという声がありましたけど、そういうことがだんだん言えなくなってしまう。本当に今は危機的な状況なんじゃないかと思っています。

湾岸戦争が終わっていないことを提起する具体的な方法の一つとしては、たとえば、『太陽の男たち』と

いう映画を多くの人に見てもらう運動をしようと思っています。フィルムがずいぶん傷んでいるので、もう一本、新しいフィルムをつくって、上映運動をするつもりです。ただ評論するんじゃないくて、こういう会を積み上げていきたい。自分自身の感性を磨くためには

〈自立の心理学〉で学習していますが、それを積み上げていきたい。とるに足らないことなのですが、小さな人間の思い、小さな行動を大切にすることがとても大事じゃないか、と思っているところです。すべての兵器の廃絶を言い続けたい。私はブッシュさんにしてもフセインさんにしても、彼らが兵器を持っていなかったら戦争はしなかっただろう、別のオプションがあったらう、と思うんです。日本は幸いにして、憲法九条を持っている。これだけは最低くずしてはならない。これをくずしたら果てしなく戦争のほうに傾いていくと思います。日本の反戦運動は反核を中心にしてきましたけど、私は東京大空襲を見て、通常兵器を持つということがどんなに悲しく恐ろしいことかを骨身

にしています。まずは兵器を持たないことが根本です。殴られても、ぶっ倒されても、罵倒されても、これだけは貫き通さないと、日本は選択を誤るんじゃないかと思っています。

女丁 今の揚げ足を取るわけじゃないんですけど、日本はもう兵器を持っているし、自衛隊も海外に出ているっていうことは、世界の人たちが現実のこととして認識していると思うんです。まだ自衛隊の派遣は合法にはなっていませんけど、それを合法化しようという動きがある以上、そこをどうするかということを経営的に考えていかないと、架空の議論になっちゃうんじゃないかと思っています。

斎藤 すでに持っているからこそ平和憲法の意味が大きい。アジア二千万の生命と引き換えに、世界に不戦を誓ったことを繰り返してPRして、安保や自衛隊の問題を堂々と論じたいと思います。

女U 私は小学校の事務員をしているんですが、さきほどミナイさんが学校は子どもを洗脳する所だってお

っしゃいました、本当にそれを身にしてみて感じているんです。職員会議とかにも出ているんですけど、学校は明らかに右傾化しています。文部省の力で教育委員会をととして「日の丸と君が代を必ず」と言っています。いつも職員会議で問題になって、男の先生はダメなんですけど、女の先生は結構議論しようとしています。でも結局、校長先生の一言で「これは命令ですから従ってください」って、こうなんです。事務職で子どもを実際指導しているわけじゃないから言いたかったのに言えなかったんですけど、よその学校で音楽の先生が君が代は弾けないって言ってね、校長とものすごく言い合いになって、結局教育委員会まで持ったんですけど。そこまでは先生がいてるってことは、すごいなと思っています。先生たちは心の中では戦争反対なんですけど、皆忙しくて言えない状況なんです。自分の立場もある、自分の生活を守らなくちゃならないし、反対できないと思うんです。結局、教育委員会の言いなりで、子どもたちは当たり前のように君が代

を歌って、日の丸をつけて、天皇はエライみたいな感じで教えられているんですね。それを私は、どうしたらいいのか、自分はどういうふうにすればいいのか考えてしまう。子どもにとって、やっぱり学校は大きい影響力のあるところだと思うんですね。一日のほとんどをそこで過ごすわけですから。今の子どもはシラけているけれども、私はむしろ、シラけたほうがいいんじゃないかな、学校の先生のこと信用してほしくない、って思っちゃうんです。どうしたらいいんでしょうね。

しま これからの勉強会を続けていくテーマとして、具体的に考えられるな、って今思ってたのかあったんですけど、ごまかしですよね、教師の政治的中立の意味自体が。

岸野 そうですね、今回限りでなく、この集会を次につなげていくようなことを具体的にどうしたらいいんでしょう。アンケートのほうに書いていただけますか。しま 時間が足りなくてしっばが切れて残念なんです

けど、私たち一人ひとり、ちょっぴり勇気が出たような気がして、とてもうれしく思います。今日はじめてお目にかかれたたくさんの方々と、率直な意見の交流ができたことが何よりの収穫です。その内容を「自立の心理学グループ」でもう一度耳を傾けて未来に向けての問題点を整理し、再びミーティングを計画したいと思います。本当にありがとうございました。

#### 「自立の心理学教室」へどうぞ

この号の記録のように、それぞれ肩の力を抜いてホンネで話し合う——それが「自立の心理学教室」です。毎月一回開催、一月は二十四日（金）夜七時—九時に開きます。この「湾岸戦争から未来へ」を読み直し、それぞれのご発言をもう一度心にひびかせようと話し合っています。初めての方もどうぞお気軽にご参加を。場所は「あこら読書室」。  
地下鉄丸の内線「新宿御苑」下車すぐです。  
・（地方の方はテープ参加も可能です）

## 見えない戦争

——私が訪ねた戦後の湾岸

見えない戦争・斎藤千代／バーレンの海に潜って・日野雄策／戦後のイラクの状況・（国連調査団）  
／戦後のイラク国民の健康・（国連調査団・ハーバード大学調査団）／ラムゼー・クラーク告訴状

斎藤 千代編著

四六判 352ページ

定価 1545円

BOC出版部

〒160東京都新宿区新宿1-9-6  
電話03-3354-3941 送料別 03-39331



# 体験

## パレスチナキャンプで

田宮友恵

私にとって、パレスチナ入りの理由は簡単だった。

「中東問題の本質はパレスチナ問題」を、イラク入りしたメンバーは一応の計画をやり終えると、異口同音に唱え始めていたが、だからといっていきなりイスラエルに飛び込んで「みえた！」なんてもんじゃないのはわかっていたし、正直に言う私の場合いいかげん一人になったかったのだ。一人になってイラクで見たこと、戦争を契機に私の回りで目まぐるしく起こったことをぼーっとしながら考えたかった。ついでに“旅行の虫”が体の中でウズウズして、耳から目から飛び出してきそうでもあった。

「なんでもみたい」式好奇心が私をいろいろな経験へと誘うことになった。そしてそれらの経験は後から考えると、とってもロマンチックに「よかったわねえー」と言って記憶の束にごっちゃにまとめて忘れられる類いのものではなく、いつまでも心の隅っこにひっかかってことあることに自分の生き方を問うてくる、そんな経験だったと言えるだろう。

## “聖地”で

一応エルサレムのことを言うと、私はエルサレムが怖かった。何が怖いかというと、とにかく“狭い”のだ。石造りの町の無機質な冷たさも手伝って、入り組んだ狭い路地が両側から高い壁で包まれることで出来ているエルサレムの旧市街で、私は何度もいいような不安感に襲われた。とりわけバザールのである朝など、狭い路地を人々がびっしりと埋め尽くし、もう抗えない力の法則で先に流されるしかなく、アラブ人のおばさんの厚い胸のはざままで窒息死するのではないかと思っているそこに、奇声を発してトロッコのようなものを押したあんちゃんが突っ込んで来る。のっぺりとした水田に囲まれて育った私にとって、それはほとんど死の恐怖だった。新宿御苑の花火を見に行った時も、あの爆音と警察の怒鳴り声と急にアナーキーになった群衆のなかでいて、これは戦場ではないかとむちゃくちゃ怖かった記憶があるが、それもエルサレムの比ではなかったと思う。そのうえエルサレムでの死の恐怖は、そこに住む住民にとってもっと膚に近く、現実的な姿で存在していた。銃口は誰もが背中になんかを感じることができると至るところで光っていた。安宿の屋上でぼんやりしていても、視力がやたらいい私の目は、すぐに建物の上のイスラエル兵のヘルメットと銃の輝きをとらえた。一触即発の空気が狭い町中に立ち込めているようだ。

「これはぼーっとするところではないな……」なにかあまりにもさまざまな情念に満ちている町といった感じで、落ち着いてものを考えるところではなかった。

それで私はその蟻の迷路のような石の路地を、せかせかとあてもなく歩き回ることに時間を費やした。細い通路の別れ道を気ままに選んで歩くのは、ラビリンスに入り込んだように変な興奮があった。一度、アラブ人居住区をうろついた後、そうと知らずに湿った暗いトンネルの入り口まで行き当たり恐る恐るそれを抜けてみると、そこは雪国だった、というくらい全く違った世界が開けたときにはたまげてしまった。ここにきて初めて空を見たと感じたその大きな広場の一角の壁に向かって、黒衣のラビたちが群れをなして熱心に祈りを捧げている。広場では貴公子のように正装したユダヤの子らが駆け回っている。彼らはみな鹿や兎などの優雅で愛らしい小動物を思わせる。私は偶然アラブの居住区からあの有名な嘆きの壁のあるユダヤ人地区に抜けて来たのだった。それがエルサレムの不思議だった。いままでの旅では、地上をつたって国から国へ移動するときには、ほとんど国境など無に等しく人種や文化の緩慢な変化を感じたが、アラブとユダヤとアルメニアの地区が城壁内でくっきりと分かれているエルサレムのそれは、暗いトンネル一本を隔てただけであまりにもその差異が鮮烈だった。何とも複雑な気持ちでラビの奇妙な動きを伴った祈りに見入りながら、神様の顔が見て見たいもんだとぼんやり思う。必死に祈るこの人たちの敬虔な気持ちと純粹さから、よけいに『独善』という文字が虚しく頭を横切った。しかしラビたちのその恍惚とした様子にしろ、その奇妙な腰つきにしろ、ある動物の性交を思

い浮かべてしまったのは私だけだろうか。ちなみに私は反ユダヤなんかでは絶対になく、ユダヤ人の友達も数人いるが、どんな宗教でも人種でも独善的になって他を圧するのには反対というだけのことだ。まあいいかげんにパレスチナキャンプにはいらないと、いつまでも話が終わらないから、このへんでエルサレムはおしまい。

### アラブの若者はナンパをしない

まあそれはあたりまえのことだろう。イスラム色の強いアラブ諸国では、厳しい戒律を守って女性は今も髪や体を隠している。未婚の女性が外で男性と手を握っていてもいけないそうだ。アラブの若い子たちはとっても純情なのだ。（それで思わずメンバーの辻がバグダッドでロマンスに走ってしまったのは有名な話）。だから道端で若い男に話しかけると、一見すごくこわそーな髭のおにいさんの顔に信じられないくらいはにかんだ笑顔が浮かんで、思わずはっとさせられることがある。初めて占領地の難民キャンプに入った時もそんな笑顔に救われた。思えばほとんど衝動的に、バスの中で教えられたままにあるキャンプの前でバスを降りた時は、親友の辻と私はかなりびびっていたのだ。アンマンであった日本人カメラマンも、キャンプの小学校を訪問した時、圧倒的な歓迎ムードの中だったとはいえ、たった一人の少年が投げた石が命中して目を負傷したのだと言っていたし、外国人はパレスチナ問題を国際的に知らしめるために殺されるーなどというんでもない話

も聞いていた。それに私たちも西側でパレスチナに悪意の報道を伝える心配がないと、誰が一見して判断するだろうか。なにも判断できない子どもたちからの投石が一番こわかった。しかしイラクでも情報を無反省に受け入れると何も見えてこないというのは実感したので、東京にいたって運が悪けりや死ぬことだってあるんだから、今回はやっぱり危険を冒しても自分の目で真実を見たいと決心したのだが、私たちの場合はそんな心配は最初から杞憂となった。

その「エル・アゼ」というエルサレムからベツレヘムに向かう途中にあるキャンプの前でバスを降り、まず目に飛び込んできたのはどう見ても私たちに不穏な眼差しを注いでいるアラブの青年の一人だった。しかし彼らは二人の若くかわい（反対意見があるかもしれないが……）異国の女の子に声をかけられた瞬間、その思わずはっとするくらいはにかんだ優しい笑顔を浮かべた。最初の「げっ、こわい」が「やったね」になると、もう話はいく、彼らもすぐうちとけて至れり尽くせりの親切さで英語の話せる男性を連れて来てくれたり、家に招きいれてあの香りが良く色も美しい小さな菓子を浮かべた甘い紅茶をこちそうしてくれたりした。キャンプとはいっても、私が訪れた所はいつもきちんとしたコンクリートの建物の住居で、ソファやテレビやラジオや電気製品がおかれた応接間はこの家庭でも清潔で、大人数の家族の小さな女の子たちがせっせと掃除をしていた。そしてそんな応接間には、きまってるきれいな額縁にかけてあるコーランや、牢獄に入っているという若い家族の写真がかけてあった。

そして機械修理工らしいそのきれいな英語を話す男性から二時間近くだろうか、初めて私はパレスチナ人の口から語られるパレスチナの問題を聞いたのだった。その時の話は後で行くことになる「ムハエム・アラール・ブキャンブ」で聞かされたこととほとんど重複するのでそのときに詳しく書くが、不条理な状態におかれていた自分たちの苦悩や生活の困窮を語る彼の口調は余りにも淡々とし、決して激することもなく、かなり衝撃的なその内容にかかわらず、なにか静かに語られる物語を聞いているような不思議な気持ちになったことを覚えている。そして真の意味での誇り高い人間を思わせたこの人物の言葉の中で、どうしても忘れられないことだけを書いておく。それはこんなふうなものだった。

「私は決してサダム・フセインとその侵略行為は支持しない。わたしはパレスチナの独立を心から望むが、本当のムスリムは殺人行為なく戦うべきなのだ」

そして彼はこうも言った。

「私はユダヤを人種として憎んでいるのではない。昔エルサレムのホテルで働いていたとき、私にはたくさんいいユダヤ人の友人がいた。インティファダ以来、彼らとの交際は禁じられて、笑いかけただけで罰せられた。いつか彼らと本当の友人になれる日がくるだろうか……」

話し終わると彼は私たちをある青年の所に連れて行ってくれた。その青年はひどく落ち着きのない疑い深い目で私たちを迎え、少しうちとけるとシャツをめくって背中中の銃弾の痕を見せてくれた。その傷は太く深く真っすぐに彼の背中を走っていた。デモに参加した

時に石を投げて撃たれたのだ。大学が封鎖されて、もう何年も大学に行っていないというこの青年は、人を不安にさせるようなすきんだ視線や落ち着きのない話し方をしたが、最後に日本に留学したいといい、なぜか大きなクリスマスツリーの写っている古ぼけて黄色くやけた写真をさも大事そうにプレゼントしてくれた。

そこを後にして私たち二人はなかなか興奮と感動が覚めやらぬといった感じだったように思う。彼らは突然やって来た異国の人を客人として暖かく迎え入れ、友人として真摯に話をしてくれた。恐らくいくつもあるパレスチナキャンプで外国人を巻き込んだ事件がまったくなかったと言えば嘘であろうが、たとえば宮崎クンの事件が外で流れれば、外国人が日本というのは若い男がみんなアニメビデオに囲まれてたまには幼女を切り刻んで遊んでいるコワイ国だと安直に直結するのが嘘であるように、パレスチナのキャンプの大部分でまた、普通の人々が自分たちのおかれた状況の中で普通に人間らしく暮らそうと努力している。そんなあたりまえのことこそ情報は時として私たちの想像力の外に隠蔽してしまう。限られたソースからの限られた一部の情報を切り取って全体としないこと、それをまた今回も学んだ。

## 再びキャンプへ

翌日の朝、再び辻とエルサレムのダマスカス門を出て、“ムハエム・アラールブ”とい

う、難民キャンプの名の書かれたメモを振り回し、相乗りタクシーに拾われてそこで降ろされるまで、その時間はかからなかった。

共にイラク入りした日本人メンバーのうち五人は、エルサレムで夜になると安宿に集まり食事をいっしょにつくったり、それぞれの一日の出来事を語り合ったり、スポーツチームと称する驚異的に狭い宿の一室の裸電球の下で卓球大会に興じていたが、その宿のオーナーの若いパレスチナ兄弟は、どうやらそこに来る外国人旅行者に自分たちの歴史を少しでも理解して祖国に帰り伝えてもらおうという使命感に燃えているようだった。またそこには世界各国の一人旅の若者が流れついており、東京で英語の先生をしていたというオーストラリア人もいた。宿屋の弟はイスラエル兵に殺された人たちの写真集、パレスチナソースの資料集などを見せてくれ、必死に歴史を伝えようと熱が入って話し始めると止まらないといったふうだった。そして兄のほうが、このキャンプに行ってみたらと教えてくれたのが「ムハエム・アラール・難民キャンプ」だった。

折しもその日はユダヤの祭日の土曜日で、バスは連休で午後からは道も閉鎖されると聞いていたが、まあどうにかなるだろうといつもいいかげんさで私と辻は相乗りタクシーに乗った。城壁を離れ、四月の心地よい空気をあびながら、視界をどこまでも広がる乾いた大地を車で走ると、エルサレムでなぜか閉塞状態に陥る私の心はほっとする。私たちの横では、若いお母さんが乳飲み子にそっと乳を含ませている。アラブの女は全身をゆったりと布で包み、奥ゆかしいようでいて、しかし黒い瞳には強い意志の光が隠せない。年を



聞くと私たちより若い。けれどどうみても堂々とした貫禄のおかあさんぶりには圧倒されてしまった。

エルサレムを出てヘブロンの方角に向けて二時間半以上は走っただろうか。車は突然眼前に現れた小さな集落の入り口で止まった。明らかに昨日のキャンプとは違う緊迫した雰囲気は、その集落の道路に面した部分がすべて高い鉄条網で囲まれていることから発しているのだった。そのうえ入り口として開かれている鉄条網のすぐ脇の建物の屋上にはイスラエルの国旗が翻り、その高みからは銃を構えたイスラエル兵がこちらを見遣っている。着いたそうそう“やばい”という感じだった。冷汗の流れるような思いで、どうにか前のように早く誰かと知り合いになろうと、さっきのタクシーの運ちゃんに窓ごしに話しかけている若い男の子に声をかけてみる。彼は一見悪人面だったがもうなんでもよかった。しかし彼は英語がまったく話せない。でも一生懸命理解してなんとか力になってくれようとしているのはありありとわかった。英語の少しわかる運ちゃんが助け舟を出し、彼に何か指図している。彼はまたもや私たちを安心させるような笑顔を浮かべてついてこいというように合図をし、彼について入り口をまたぐと、背中に銃口を感じながら、脇に家々の立ち並ぶ細い坂道を上っていった。すぐに子どもたちが物珍しげによって来たかと思うと集団興奮状態のようなものに陥って、歓声をあげて走り回りながら後ろをぞろぞろついて来る。その歓声を聞きつけて戸口からまた子どもたちが次々ともし出てきてはカーニバルに加わる。ただならぬ一行を女たちが不審そうに窓越しに見守っている。案内の青年はもう

得意でたまらなくて時折振り返ってはほとんど野獣と化した子どもたちを怒鳴りつける。キャンプに入る外国人がみんな経験する光景だろう。狭いキャンプに文字どおり縛られるようにして生きているパレスチナの人たちには、異国の、とくに極東からの訪問者がほとんど珍しさに違いなかった。

案内の青年がまず、ある一軒の家の戸口で誰かの名を呼ぶと、四十過ぎぐらいの男性が庭から顔を見せた。青年が何かアラビア語で説明していたが彼の表情は堅く、不信任感が露骨に表れていた。奥さんも不安そうにかけから顔を覗かせている。私はおそろおそろ「パレスチナのことを知りたい、キャンプの生活を教えてくれないか」と尋ねたが、彼はなにも答えず首を横にふった。私は少なからず失望したが、青年は「大丈夫、ついてこい」と言うように再び違った家の前まで私たちを導いてくれた。そしてそこで私たちは、私たちを親類のように手厚く迎え、はからずも一夜を過ごすことになるアルリー一家と出会うことになる。

### アラブの郷ひろみと十三人の家族

まず顔を見せたのは、典型的なアラブの美男子で、強いてたといえば浅黒くなって瞳に知性の輝きと思慮深さを付け加えた郷ひろみといった感じだった。彼はアライといって二十四歳でその家の長男であることが後でわかった。彼は快く私たちを応接間に迎え入れ、

その応接間に次々と入って来る家族を紹介した。その建物はというと、中庭を挟んでかなりゆったりとした空間に幾つもの部屋があり、日本人からみればその空間の取り方は羨ましいくらいの住まいだった。辻と一緒にお茶をこちそうになりながら、この戦争を機に私なりのこだわりをもって中東にやって来たこと、つい最近イラクから出て来たばかりだということ、そしてパレスチナの真実を知りたいと思うにいたったことなど、をつづげざまに語ったように思う。十二人の子どもを産み育てたという肝っ玉母さんふうの母に、それらを通訳しながら、アラブの郷ひろみは非常に満足そうであり、遠い所からお客さんを迎えられて、また自分たちのおかれた状況を見てもらえるのはとても嬉しいというようなことをいった。そしてすぐに弟や友人などそこに居合わせた人たちの興味はイラクの戦後の様子に集まった。朝潮ふうの人情の厚いお母さんはすぐ激するたちらしく、イラクの破壊の状態や生活必需品の不足を伝えると、「フセインとイラクの人たちがかわいそうだ」、とびっくりするぐらいの身振りでおいおいと泣き出した。一般的に言ってパレスチナの人にとってサダム・フセインは彼らの窮状を一気に救うかも知れなかった彗星のごとき救世主であったのだ。真実などそれぞれの立場でどうとも変わる。西側で伝えられた極悪人はここでは敗れ去ったヒーローだった。お母さんはひとしきり泣いて鼻をかむとすっかり機嫌を直して、取って置きらしいチョコをタンスの上からいそいそと取り出して、自分の幼い子と私たち二人にそれを分け与えた。二十四歳を先頭に七歳まで十二人の子どもを産み育てた彼女は、なぜそんなにたくさんの子どもをとという質問に、子どもはパレスチナの



左からアライ、タクシードライバーの弟、アライの所へ案内してくれた青年。  
左の二人が持っている書類は逮捕されたしるし。

コマンダーになるのだからと答えた。私はチョコを食べながら、それにはまったく手をつけない大人たちをみて不思議に思ったが、その月はアラブではラマダーン（断食）であったことを途中で思い出した。話題がパレスチナの不条理な難民生活のことに入ると、そこからはアライの独壇場で、彼は熱っぽくわかり易い英語で根気強く話し続けた。英語のほかに敵の言葉であるヘブライ語を身につけているというアライは、彼らの大学も閉鎖されて久しいのだが家で独学を続けているという。語学の力はパレスチナ人にとっては外に声を向けるための強力な武器であり、キャンプでは子どもたちを集めてパレスチナの歴史や英語の学習会もあるという。

イスラエル兵による突然の不当逮捕についてはよく聞いていたが、アライの話によるとパレスチナの若い男で牢獄に入った経験の一度もない者はほとんどいないらしい。実際アライ自身も二度逮捕され、二か月と四か月ナカブ砂漠にあるキツァ・オートの監獄に座った。逮捕はもちろん裁判なしで、ある日突然このような逮捕状をもってイスラエル兵が踏み込んで来て、散々家を荒らし暴行を加えた後でアライの弟を連れ去ったのだと、彼はその時の逮捕状を見せてくれた。逮捕状は、ヘブライ語で書かれてあり、アライの訳では「一二九条に従い、デモンストレーションに関わった罪で逮捕する」という内容の十行ほどのごく簡単なものだった。突然読めもしない逮捕状を突き付けられて連行されるのだ。その薄っぺらな一枚の紙は、投獄期間を去年（九〇年）の十二月から一月までと定めていたが、四月のその時になっても十六歳の弟は帰っていなかった。収容の砂漠の監獄での

酷暑は耐え難く、それにもまして面会禁止で手紙も検閲を通されるそこの孤独は辛かったとアライは言った。また千五百人の囚人に対して食糧は千二百人分しかあてがわれなかった。

アライの話どおり、その後そこで出会ったどの男たちも牢獄に入った証拠となるグリーンの身分証明書をもっていた。普通の身分証を取り上げられ、しかもそのカードでは隣の町に行くにも許可が必要となり、さまざまな制限が加えられる。

彼はひとしきり話すと家を見せようと私たちを応接間から連れ出した。かなり朝早くエルサレムを出てきたはずだったがあつというまに時が過ぎたらしく、突然正午を告げるコールンが村はずれの寺院から莊嚴に流れてきた。なだらかな山の麓に肩を寄せ合うようにして数十軒の家々が寄り集まって出来ているそのキャンプの一軒の家のペランダにあがって、そこからはそのモスク全体がよく見えた。

正午を告げられて私と辻は少し不安になった。昼からは道路は閉鎖され、タクシーももう拾えない。しかしそんな私たちの不安をアライが即座に打ち消した。ラマダンで昼食を御馳走できないが、彼らの風習では客人は必ず食事でもてなすことになっている。夕食まで待ってくれ。遅くなれば泊まっていけばいい。私たちは歓喜してその申し出を受け入れた。まさかそんなにまで親切にもらえるとは。しかし夜になって帰らなければ、宿でいっしょの日本人の三人の男連中が心配する。私が電話を借りられないかということ、キャンプでは電話を持つことは禁じられているという返事だった。

想像していたよりはかなり心地よいと見られたそのキャンプでの生活を、彼らは一九四八年に政府によってここに移されて以来、おそらく並ならぬ努力をして培ってきたのだろう。ウヌルワに与えられたという小さな一部屋の小屋での生活から、彼らは自力で助け合って家を立て、電気の配線を通し、シャワー室もトイレも全部自分たちでつくり、いまある生活を築き上げた。彼らにないのは自由と故郷なのだ。食事中にいきなりトラックに

アルリー一家の肝っ玉母さん。  
ウヌルワが与えた“住居”は  
今ではうさぎ小屋



乗せられ、見知らぬ土地に運ばれて来た一家が、念願かなって再び故郷を訪れることを許されて懐かしいわが家で見えたものは、三十年の年月にさらされてしかしその時のままに残されたテーブル上の風景だったと、そんな話を誰に聞いたのか今はなぜか思い出せない。古いテレビやラジオやビデオまで揃え、部屋部屋をきちんと清潔に整え、ベランダに見事

に並んだ大人数の家族の洗濯物を見ると、

「どうにかして文化的に住むように努力しています。」

と言っていた、あの機械修理工のことが思いだされた。アライはそのあと飼っている山羊の小屋や中庭を見せてくれ、次に私たちをコンクリート製の小さな古い小屋の前に連れて来て、扉を開けてみると言った。言われるままに扉を開けると、それは兎小屋だった。それが強制移住させられたあとウヌルワに与えられた「住居」だと聞かされて、思わず笑ってしまった。日本では家は狭いから兎小屋と呼ばれるんだということアライも笑っていた。

### パレスチナの野に行く

「夕食までは時間がある。散歩しないか。」

そういわれて、私たちはアライと一番初めにアライの所まで案内してくれたちよつとこわ面だけで実はいいヤツという十八歳の男の子と四人で、キャンプを降りてぶらぶらと丘に登ったりぶどう畑の間をぬってゆつくりとかなりの時間パレスチナの野を歩きまわった。キャンプを出るときは、あの鉄条網の張られた道路に面した方へではなく、キャンプの脇から畑のほうへと抜けた。パレスチナの大地は生物の息吹をあまり感じさせない乾いて荒涼とした土膚の色が私には寂しく思えたが、それでもところどころでオリーブがたわわに実をつけ、強い種の緑がまばらだが地面をうっすらと覆い、よく見るとさまざまな小さな

野の草が咲き、ところどころに湧き水が溢れ、砂漠に慣れた人々にとってはそこは天国なのだろうと次第に思った。私たちはお互いの文化について、慣習について、東京について、さまざまなことを話しながら歩いた。アライは日本では男の子と女の子は何歳くらいから付き合うのかとか、デートなどするのかとか、どこにいくのかとか、結婚はどうだとか男女交際のことをしつこく聞いた。私ができる限りありのままを伝えようと、アラブではこうやって今男と女が連れ立って歩いていても良くないのだ、と溜息をついた。そうするうちにタフな辻は畑の向こうに続いている丘を憧れのこもったような目付きで眺めていたので“あぶないな！”と思っていたら、案の定“あそこに登る！”と決めたらしく一人でぐんぐんと小高い丘の頂上を目指して登って行った。さすがのアラブの男二人もそれにはびっくりした様子だったが、みんな遅れじと辻の後を追った。怠慢な私はどんじりで“やれやれ”という感じで花や虫を見つけては寄り道しながらよぼよぼついていった。下から見ると遠く見えた頂上も斜面は険しいが距離としてはそうでもなく、足元の刺だらけの植物をかきわけて頂上につくと、そこにはなぜか一面に真っ白な花が咲き乱れていた。辻と私はここぞとばかりお花畑の少女となって写真に収まった。日本のことをしきりに尋ね、見知らぬ世界に憧れを募らせていたアライだったが、外国どころか彼は隣町さえ許可書なしでは行けないのだ。自分はこの美しいパレスチナの自然の中で、食物を育てながら子を生み育てて行くのが夢だと彼は言った。そして丘に立って足元に大きく広がったパレスチナの大地を眺めながら、とても誇らしげで、何度もそれが美しいと言って感嘆していた。



「それでも見も知らぬ故郷の村に帰りたいのか。ここが自分の故郷ではないのか。」  
そう尋ねると、故郷に帰るのはパレスチナ人の悲願だ、と言った。しかし何よりも「自由」が欲しいのだ、と“freedom”に力をいれ、彼は端正な顔を引き締めた。アライとは何を話してもいつも最後には「自由」に行き着いた。

帰り道は羊飼いのロバに乗せてもらったり、洞穴を探検したり、私たちはその長い散策を十分楽しんだ。あつと言う間に夕方になって元きた道を戻り、キャンプに再び入る家にとどろくまでにもまた何軒かの家に招待された。皆異国の客を心から歓迎してくれた。どこに行ってもたくさんの子どもがいて、みな元氣も良いがお行儀もよかった。五、六歳でも立派に家事の一部を任せられており、小さな女の子が体よりも大きな掃木をもって部屋を掃除するほほえましい光景を至るところで見た。前にヨルダンでも、ベドウィンの小学校にも上がらない年格好の子が木の枝を持って立派に羊飼いをやっているようだったのには感心したが、ここでも子だくさんの母を助けて子どもはよく働いていた。いつ何時兄や父が拐われ殺されるかも知れず、理由もわからず家を踏み荒らされ肉親が暴行されるのを目の当りにするキャンプの子どもたちは、確かなになにか大人びた子どもらしからぬ雰囲気や表情をつくることがあった。キャンプの多くで精神に支障を来す子どもが増えているというのにはまったく頷けた。

キャンプの下水はまったくなくて、汚水は家々から直接道路の上の細い溝を伝

って下の汚水池に流れ込んでいるのだが、それでせっかく清潔に家の中を保っていても、いつも何かしらキャンプの中では異臭がした。帰路そんな小さな流れの一つを指さしながら、アライはこれをキャンプでは“ボルガ川”と呼ぶんだと言って私たちを笑わせた。しかし整備されない下水が、病気や伝染病をはやらせ、とくに外で遊び回っている子どもがすぐにやられるのだと即座に続け、深刻な表情をした。寄り道をしながら家に帰る途中、祭日の御馳走の香りが家々の台所から漏れ、昼間取るものも十分取らずに野を歩き回った私はもうそのころは空腹でふらふらといった感じだった。それでアラブの家庭料理にかなりの期待をかけて家に着いた。

### 大騒ぎした一晚

そしてやはり期待に違わず、その日の夕食もその夜の集いも素晴らしいものとなった。そのことはここで詳しく書けないが、チキンをメインにしたとにかくおいしい食事の後は、家族やら親戚やらが集まって十数人が絶えず入れ代わり立ち変わり訪れ、その度に私たちはみなから歓迎の挨拶をうけ、いつの間にか男たちがトランプに興じ出し、女たちはおしゃべりに花が咲く者、テレビをみる者、おんぼろテレビが一台だけの八畳くらいの居間は人の笑いと熱気に溢れた。そんな人びとの様子は見るだけでも楽しかったが、私と辻は来客の相手をしたり、その家の八歳のおませで頭の良さそうな、しかもすごい美人になりそ

うなイフラシーと絵をかいて遊んだりした。あのお母さんもその娘がお気にいりらしく、この子を日本に連れて行って立派な教育を与えてくれ、と冗談交じりにしかしかなり本気で言っていた。それでいてその子がいなくなればお母さんは毎日涙を流しそうなのだった。実際その子をウヌルワがイタリアのどこかにやる話があったそうだが、結局お流れになつて小さな彼女はとても傷ついたそうだ。

その後パレスチナの民族衣装を着せられた日本人二人はその恰好で隣人回りまでした。民族衣装について一言いうと、辻はともかく私は全然似合わなかった。

「もうちょっと似合うやつがあったと思うよ」とアライは変な慰め方をした。裾を引きずって隣の家に来て見ると、それは私たちを運んでくれたタクシー運ちゃんの家であることがわかった。昼間もここで彼のおかあさんが焼きあげたばかりのパンを貰って、ラマダンだというのにそのあまりのおいしさにおもいきりばくついてしまっていた。パンだけの昼食だったがパンがこんなにおいしいと思ったのは初めてだった。「今まで食べた中で最高のパンだ」と思ったままに言う、彼女はものすごく喜んで、あんたたちは家族なんだからまたいつでもおいで、とか嬉しいことを言ってくれた。

昼間キャンプでは、若い男たちが仕事もなく明らかにフラストレーションの溜まった様子でうろついていた、あるいはキャンプの中でみんなの家を建てるのを手伝っていたが、タクシーで稼いでいる彼の家は調度にも気を使う余裕があると見えてアライの所とくらべて数段裕福そうに見えた。ユダヤ人の給料平均が三千シェッケルだとすれば、パレスチナ

人の場合五百シエッケルぐらいだと聞いたが、戦争が始まって以来解雇されてその五百の収入源を断たれるパレスチナ人が急増しているのだとアライは愚痴った。それでもアライの父は建設労働に携わっているから大学へも入れてもらえたが、仕事がなくまったく収入のない家族は大変らしかった。ここも大学の学費は高額だ。

タクシードライバーの家のテレビはうつりも良く、お茶を飲みながらヨルダン放送のニュースを見ていた私は画面に海部とブッシュと一緒に現れてにこやかに握手している映像をみてびっくりした。そのニュースは今回の戦争で日本がどのような役割を果たしたか、といった類いのものらしく、短いニュースの中で新宿やコンピュータが並ぶ映像が切れ切れに現れた後、各国がアメリカにどれだけのお金援助をしたかが円グラフで現れ、赤で塗られた日本の数字がクローズアップするという、そこに居合わせた私たちにとっては衝撃的なものだった。日本ではほとんど皆無に等しかったが、ヨルダンでは国会で海部首相に靴が投げられたあの映像を何度も何度も繰り返し放映したらしい。その度にアラブ人はテレビの前で拍手したという。とにかく恥ずかしい思いをしたが、パレスチナのキャンプでそんな映像を目にしようとは夢にも思わずびっくりしてしまった。

### 夢のような一夜が過ぎて

そんな夜もとうとう終わりが来て、アライの十九歳の妹のマハの部屋の床に布団を敷き、

三人で仲良く眠りについた。朝方早く微かな物音がして、寝ほけまなこで目を覚ますと、マハが一生懸命服合わせをしてお洒落している。どこにいくのだというとうと学校に行くという。二か月閉じられていた学校が再開されてから二週間目で、ちょうど大事な試験があるらしい。まだ布団の中であちこちながら見ていると、ピンクのかわいいミニスカートにやっときまったように、ああやっぱり若い子はイスラムでもミニスカートなんてはいちゃうんだと思ったら、結局さあおでかけの段になってあの白い布を頭からすっぽりかぶってなんにも見えなくなりました。誰も見ないのになんでめんどくさいお洒落するんだろう、やっぱり年頃なんだろうとかお婆さんのように考えながら私はまたうつらうつらと眠りについてしまった。マハが出掛けてそう時間がたたなかつたと思う。私は突然の鋭い銃声と叫びに、まどろみ始めた眠りからすぐ目が覚めた。ただごとではないと思い服を着るとお母さんが胸を押さえてうろたえながら私たちの部屋に入ってきた。「マハが、マハが」となにか一生懸命私たちに話しかけながら出て行つたばかりの娘が心配でたまらないらしくおろおろとしている。私も不安でたまらない。すぐにマハが帰って来てみんなを安心させたが、事情を聞くと一緒に登校していた中の一人の男の子が、イスラエル兵に向かって石を投げたという。パレスチナ人にはいつも投石やテロは支持できないと言って来た私だったが、このときも「なぜそんなことを……」と腹だたしい気がした。しかし子どもにいきなり撃って来るとは……。マハはしよげてせっかくお洒落した服を昨日までの部屋着に着替えた。これでまた明日から学校が閉鎖されるのだ。やりきれない気持ちで迎えた朝だっ

たが、しばらくしてまたなにか外で騒ぎが持ち上がった。今度はもっと近かった。私は外に飛び出し壁の隅から騒がしい物音のする方向をのぞく。すると少年たちが一目さんでこちらのほうに突進して来るのが即座に目に入った。すぐにやばいと思って家に引き返す。そのうえ外ではすぐに喉が締め付けられるような感覚に襲われた。催涙弾が撒かれたのだ。家の中でもガラスの隙間などから皆不安げに外の様子を伺っていた。私は言いようのない憤りに駆られながらマハを威すように「こんなことが日常のはずないだろう?！」と尋ねる。マハは諦めたように「日常だ」と答えた。つまりこれがパレスチナの現実なのだ。運が悪ければ犠牲者が出る。昨日の楽しかった一日までが不意に遠のいて行くような妙なむなしさだった。それからしばらくは、武装した兵士が銃を背に狭い路地を練り歩くのをベランダに集まった私たちは息をひそめて見ていた。小さな子たちも同様だった。しばらくして兵も姿を消しやと平穏が戻ると、お母さんがラジオのスイッチをいれた。さっきのことが嘘だったかのように、まるで何事もなかったかのようにみなそれぞれ、一日を始めた。マハはもう忙しそうに部屋を掃除し始めた。そこから流れる叙情に満ちた音楽を聴きながら、もう昼の強い日差しを予感させている太陽を受けて、私と辻はしばらく茫然としてベランダにいた。お母さんはその音楽を聴きながらまたおいおいと泣き始めた。マライは朝からどっかりと長椅子に寝転がり、また何もすることのない一日をけだるげに受け入れた。彼の単調な日常にとっても私たちの訪問は特別なことだったに違いなかった。だが私たちにもここを去る時が近づいていた。その日もバスは運休だった。朝出れば歩いて



キャンプを出るとき  
イスラエル兵

でも夜にはエルサレムに着くだろう。その時の私には、もうまたいつ会えるかわからないこの人たちと別れたくないと言う気持ちと、一刻もはやこんな不可解な世界を出たいという気持ちとが奇妙に入り交じっていた。私たちは皆に見送られて戸口を出た。別れに母さんはまた泣いた。みんな最上級の言葉で別れを惜しんでくれた。隣のおばさんも近所の人も声をかけてくれ、この人たちをこの境遇のまま置き去りにすることはほとんど罪のように思えた。

またあの無意味な鉄条網をくぐる時が来た。こんどはイスラエル兵がジュースの栓か何かを見張り場の屋上から投げてきた。空を仰ぐとこちらをみてにやにや笑っている。私が露骨にカメラを向けると、にやにやは両手をこめかみにあてて舌を出しておどけたポーズをとった。私はシャッターを押して、お返しにクルクルパーをしてやった。

別れ際に私はアライの頬っぺたにキスをした。普通の挨拶のつもりだったがアライはかなりうろたえてしまった。後で村の人に变に言われていないと良いのだが……。タクシーが途中まで走るので私たちはそれに乗った。私たちはそこを出るが、結局すべてはなんら解決されることのないま後方に残っているのだ。何度か振り返るとそこに長身のマライの姿が見えた。

タクシーを途中でほうり出された私たちがその後どうなったかという、実はあつという間にエルサレムについてしまったのだ。タクシーを降りてすぐイスラエル兵の車を

ヒッチし、それを降りるとこんどはクリスチャンの男性が拾ってくれた。それでこうやって無事日本にいるわけだが、今こうやってここで、もう半年以上も前の事をメモをみながら回想し、臆げな所はあるにせよあまりにも記憶が鮮烈なことに我ながら驚き、なにかこれを書くことが親切にしてくれたどころか愛をもって接してくれたパレスチナの人たちにほんの少しでもいいから恩返しにならないかと思って一挙にたくさん書いてしまった。本当はキャンプの困難な状況を逐一書くときりがなくらいなのだが、ここではそれよりも情の厚いパレスチナの人たちを身近に感じられればと、ただ起こったことだけを忠実に書いたつもりだ。日本にいてまったく違った状況を生きている私たちの足元をたどって行けば、あの未だに取り去られない鉄条網の前にたどり着くのだと、そこに實際いる人の普通の顔や普通の生活を思い浮かべる努力があれば、パレスチナという問題にまったく無関心ではいられなくなると、信じたいと思う。





## サツ回り記者の現状

吉野理佳

毎日新聞北海道支社で記者をしています。先日、〈あこら札幌〉の細田さんに取材を申し込みました。男女差別が根底に流れている性教育を否定して、対等な立場に立った教育を主張され、実際に中・高で教えていらっしゃると伺い、わくわくして電話をかけさせてもらったのです。お会いして話もとてもおもしろく、うれしくお聞きしたのですが、逆に「『あこら札幌通信』をとりませんか?」「ついでに『通信』に何か書きませんか?」と勧められ、気がつくとも無謀にも引き受けてしまったのでした。何だかおこがましい気がするのですが、そうと決まった以上、女性記者の労働実態のようなものを知っていただきたいと思います。

女性記者といっても、会社や担当によって大きく異なるのですが、私個人の話をしますと、私は四月まで一番きつと言われる警察担当（通称サツ回り）をしていました。朝九時から夜は時間無制限。一旦帰宅しても事件があれば真夜中でも朝でも呼び出されました。普段の日でも帰宅は

夜の十一時から未明の一時ごろ。夜中に殺人や暴力団の発砲などがあると、朝方三―四時に帰るのもさほど珍しいことではありませんでした。もちろん、次の日は普通に九―九時半の出勤。泊り勤務は月三回。新聞が刷り上がるのが未明の二時半ごろ、それからシャワーを浴びて寝るのが三時過ぎ、朝は八時起き。次の日も通常勤務なので、前の日の朝九時から次の日の夜中零時ごろまで、睡眠時間五時間弱を是んで働き通しという状態になりました。

それでも男性記者は月四、五回の泊りがありますから、女性がいると泊りのローテーションがきつくなる。女性が増えるのは問題だと言われました。サツ回りでなければ、もう少し早い時間に帰れるのですが、女性は使える部署に限られる、ラクな部署にしか行きたがらないと言われるのが目に見えているので、このサツ回りを一年半やりました。

男女雇用機会均等法の施行で、女性の職場が拡大されてきたのはある意味で事実ですが、やはり男と全く同じに働く、サツ回りをやるというのが母性を危うくするのも、またまぎれもない事実です。まして、子どもを持ちながら働き続けるのは、今の勤務状態のままでは全く不可能です。サツ回りは比較的若い記者がやらされるので、未婚のケースがほとんどのため、なんとかやることはできます。が、

程度の差はあれ、深夜勤務が避けられないこの仕事をどうやって続けていけばいいのか、考えこんでしまう毎日です。このほど育児休業法が可決されましたが、ちなみに各社の育児休業制度を聞いてみました。朝日、毎日、毎日男女に満一歳まで。読売は女性のみに満一歳まで。共同通信は女性に六か月まで。いずれも賃金保障はありません。時事通信、北海道タイムスには制度さえありません。たとえ制度があっても、休業期間中の代替要員をどうするのか、現職復帰が可能か、ただでさえ他社に比べて人が少なく、泊りが一回少ないだけで、女がいると回りの男性がきついといわれてしまう職場で「私一年休みます」「育児が明けたのでまた戻ります」と現実の問題として言えるのか…。壁は何重にもあります。

勝手に個人的な状況を並べたててしまいましたが、とにかく、女性も男性も人間らしい生活をしながら、働き続けていけるよう主張すべきところは主張し、少しずつ状況を変えていかなければ……と思っています。他社にも同じような状況があり、横に手をつないでいたら……とも考えています。これを機会に皆様のご意見やお知らせを拝借できたら、とてもありがたいと思います。また、新聞で広く知らせるお手伝いができるような問題があれば、いつでも申しつけて下さい。

(『札幌あさひ』より転載)

## アイヌ民族の人権確立のための 写真パネル展

1月22日(水) — 26日(日) 新宿文化センター 入場料300円  
1/22 一般公開PM2:00~6:00 6:00~オープニングセレモニー  
1/23~25 AM10:00~PM8:00  
1/25「日本の中の少数民族問題を考える」PM2:00~  
1/26 AM10:00~PM5:00「レラの会」の踊り、沖縄のエイサー  
連絡先 東京都新宿区西早稲田2-3-18 日本基督教団内 ☎03-3205-7363

### 佐藤洋子講演会

#### 「いきいきと女が働きつづけるためには」

1992年 2月15日(土) 午後2時30分~午後4時30分  
横浜女性フォーラム 2階 セミナールーム(JR・市営地下鉄 戸塚下車7分)  
定員:88人 参加費:300円 保育:予約制(2歳~未就学児)  
主催:横浜女性フォーラム  
申込み方法:1月15日から電話または来館にて先着順

☎045(862)5052

そのしるし 註記書官全

私のひめゆり戦記

宮良ルリ著

ニライ社刊

アラブの論理

ラシード・アルリファイ著

講談社

湾岸戦争が燃えさかっていたころ、テレビに度々登場した、駐日イラク大使アルリファイ氏の端正な姿を記憶している方は多いだろう。一步も退かぬ氏の姿勢を「傲慢」と感じたという声をよく耳にした。

この本を通して思うのは、背筋をピンと伸ばして、言うべきことは言い続ける姿勢が一貫していることである。「欧米の論理」があるのなら「アラブの論理」もある、と主張するその言説を、「傲慢」と、まずは受け止めた日本人も、知らずして異端を受容しない偏狭に陥っていたのかもしれない。

イラクの論理でみた「湾岸戦争」／

湾岸危機への発火点、クウェート／戦争回避への險しき道程／わが祖国、イラクの文化と生活／日本外交への希望・そして失望／民間外交の努力と経過の七章にわたって展開される論理は、淡々として客観的で、科学論文でも読むかのような趣がある。筆者は米国の大学の工学博士の学位を持つ学者。石油鉱物資源大臣はじめ、計画、通信、公共事業・住宅供給等の大臣を歴任した人。今の日本の政治家には失われた骨格正しさが読者の居すまいを正させる。湾岸戦争に日本はどのような形で「貢献」すべきか、「貢献する金額」が先行するのではなく、まずは双方の論理に耳を傾け、万機公論に付して選択すべきだったと、しみじみ思い知る。

(千)

(四六判三二六ページ 千五百円)

その体験の重さのゆえに書き記すことができなかった戦中記が、この四、五年、続々と刊行されている。動員の名のもとに、工場に、軍の補助に、駆り出された当時の女学生の記録も多いが、この本を読み終えたと、すべての記録が色あせて見えるほどだ。

「死体からはい出したウジは濠の中をはいずりまわり、板切れや手で払いのけても、すぐまたはいのぼってくるのです。はしごは真っ白い花が咲いたようになっていました。よく見ると、それは全部ウジなのです。真っ暗な中でウジの白さでそこに死体があることが確認できるのです」中国人を、慰安婦を、「連行」した同じ力が働いたことに心が曇る。

(千)

(A5判一八九ページ二二六円)

## ◆ ニューヨークからただいま!! (11・16)

十一月五日、首班指名投票を終えて日本を出発、P K O の調査とUNCEDへ向けての「女性と環境」の会議に出席し、十二日帰国しました。

六日には国連のP K O 関係者十人に会って話を聞いたのですが、国も思想も立場も違う人たちなので、P K O に関しても、また日本の対応に対しても意見はまちまちでした。言い換えれば、厳密なP K O の規定というようなものはないと言うことです。ひとつひとつの現場にその時の状況に応じてメニューを作り、参加国を募って実行に移す、というプロセスで従来のP K O はオペレートされてきました。共通して言えることは、「P K O はあくまでも軍事だ」ということです。

八日からはマイアミで開かれた「女性環境会議—健康な地球のために」に出席しましたが、世界から集まった女性は何んと千五百人。サリーを着たインド人やインドネシア人、民族衣装に身をかためたアフリカの人たち。背広姿の男性の会議と違って地球を感じるほど多くの個性豊かな女性たちが集まっていました。問題はほとんど日本の姿がみえないことです。

市場経済のもとで環境を破壊され、貧困に悩んでいる女性や子ども、それを変えるのも私たち女性、と見事な論理の展開を見せる人がいるかと思えば、自らの実践を紹介する人もいたといった具合で、お互いに学び合い、刺激し合い、そしてもっと生きやすい環境をつくるために経済社会の新しい枠組みをつくろうと熱心な討議がくり広げられました。今回の会議で得た結論から、女性の視点から地球環境をまもる行動計画をつくり、来年六月の「地球環境サミット」に提案される予定です。

市場経済のひずみから急速に進んでいる地球環境の破壊と汚染を防ぎ、新しい二十一世紀を迎えるのは、まさに女性たちのパワーだと痛感したマイアミの会議でした。

## ◆ 「P K O 国会」緊急レポート

国連は日本にP K O 参加を要求していない(11・27)

・今日は四時四十五分頃から社会党の法案に対して自民党側からの質問がはじまりました。質問に立っているのは船田元議員、それに対して社会党からは伊藤茂、上原康助、早川勝、の各議員が答弁に立っています。「社会党案ではP K F に参加しない、これはおかしい」という質問に対し、

伊藤氏は「今こそ外交のあり方を変えるべきである。今までの安保理事会中心のあり方から社会経済委員会中心の時代に変わるといふ時に、いま自衛隊を出す必要はない」と答弁。社会党の法案は自衛隊の派兵を一切しない、文民、非軍事、民生ということの基本としていると明確に答えました。これに対し船田氏はさかんに自衛隊を出すことを主張、両者は対立しています。

一方、今日は女性の集会が開かれました。「平和のための貢献とは何なのか」という議論のなかで、私は国連に行った時の話をしました。国連で私は「日本は骨惜しみをするつもりはない。いくらでも汗は流す。しかし憲法に反する形で軍隊を出したくない」とはっきり言いました。国連で聞いたことのなかで大事なことは、日本は軍隊を出す義務はないということです。さらに私がもっと大事だと思ったのは、日本は今までに大きな軍事的な歴史があるということを配慮すべきだということでした。日本はいま自分の国の決定によって派兵しようとしているのであって、国際社会から求められているのではないということがはっきりしました。国連で話を聞いたある人は、「もし日本が憲法に反するから自衛隊を出せないというなら、事務総長も国際社会もそれを理解する」と表現していました。とにかくあまりにも急な形で、しかも国会の承認なしで出すという

ことに、むしろ外国のほうが驚いています。

大きな歴史の危険な時期が、真珠湾から五十年という時に幕を開けようとしています。この危険な幕を開けてはいけない、そのために頑張らなければならないと思っています。参議院にまでもなくこの法案は回ってきます。そのときはどうぞ皆さん応援してください。みなさんの支持があればじめて国会の中で私たちは頑張れるのです。

#### PKO法案衆議院委員会で強行採決（11・27）

この文章をタイプしている間に、自民党は本日五時半すぎ衆議院平和協力法特別委員会でも強行採決した。

参議院での審議入りに対しては、国連の資料の公開について社共ともども公開を要求しているが、政府は閲覧のみで提出は拒否している。今回のような重要な法案の審議のための資料が、マスコミでも公然と報道され、政府関係者のみが利用しているのに国会議員には公開されないというのでは審議のしようもない。国会議員だけでなく一般国民に公表されてしかるべきである。今日第一回目の参議院国連平和維持活動協力法案特別委員会の理事懇談会がひらかれ、その席でも国連資料の公開がなければ審議ができないと社会党は主張、あくまでも資料の公開を求めていく考えである。

本来ならば重要法案はもっと時間をかけ審議すべきであるが、衆議院はたった一週間であった。参議院でも同様に約一週間で審議を終えようという動きがある。

なんとしてもこの法案を通すわけにはいかないと、連日国会議事堂周辺への請願デモが行われている。社会党では全国会議員に対し禁足を言い渡している。いつ何時国会が開かれ強行採決が行われるかもしれない状態なので、いつでも直ちに採決を阻止できるよう、議員が東京の国会周辺から離れることを禁じているわけである。この間は、地方出身の議員も地元に戻ることができない。

今日から参議院でPKO法案の審議開始(11・28)

今日から参議院におけるPKO法案審議がスタートした。九時三十分議員総会。議院運営委員会からの報告によると、参議院では強行採決をしないことを確認したという。だが油断はできない、参議院で社会党は政府の「国際連合平和維持活動等に対する協力に関する法律案」の廃案を目指し、徹底的にたたかうことを確認した。

十時本会議。議長の左側に宮沢首相、渡辺外相、加藤官房長官が座っている。めずらしいのは、右側に社会党が提案する「国際平和協力活動に関する法律案」の提案代表者である野田哲議員が、いつも大臣が並ぶ席についているこ

とである。社会党の法案は、自衛隊を派遣する政府案に対し、自衛隊を派遣しない対案である。宮沢首相は最初から悲痛な表情だった。下唇を噛みしめるのが癖か、目を細め、上を向いている。斜めにかまえているのは渡辺外相。これだけ渋い顔はあるかというほど渋い表情。野党席からヤジが飛ぶと眼鏡の奥からぐっと睨みつける。法案の趣旨説明を終えた加藤官房長官は、よほど疲れているのか必死に睡魔とたたかっている様子。

自民党の質問者は板垣正議員。「激動する国際情勢について総理の認識を問う」「明治維新を振り返り、いま平成の日本、日本人が戦後のカラを打ち破ってよりどころを見つけるべきである。明治維新、戦後復興に匹敵する大転換の時だ。憲法論議がタブーとなっていた不幸な戦後の風潮をいまこそ改めるべきである」

「ファッショの始まりだ」とヤジ……。

明治維新以来の日本の歴史を考えるからこそ、決して日本は武器を持って海外に出ていってはならない、との決意をもって我々は平和憲法を制定した。今こそ日本が率先して世界に平和を訴えるときなのではないだろうか。新たな国際情勢のなかで、我々の選択するべき道は、過去の、武力で武力を押さえつけるというやり方を繰り返すことではない。日本ができる国際貢献とは真の平和のための貢献で

あり、憲法が示している平和主義の世界的な広がりをもった実践である。

明日から特別委員会の審議が始まる。社会党の「国際平和協力活動に関する法律案」の提案者として、私は初めて答弁する側に座ることになっている。参議院の審議は予断を許さない状況だ。皆さんのあらゆる形で支援協力をお願いしたい。

参議院国際平和協力に関する特別委員会始まる(12・5)

参議院社会党が提出した「国際平和協力活動に関する法律案」の発議者として、昨日から答弁者席に座っています。

今朝、初めて答弁に立ちました。

質問者は社会党の矢田部 理さん。「ニューヨークの国連本部でのPKO調査の報告をしてほしい」というものでした。私の答弁――

「お答えいたします。先月国連本部を訪れ、PKOの責任者をはじめ十人の担当官に会うことができました。その発言の中で、もっとも大事だと思ったことをご報告しておきます。

『日本が、憲法の制約そして歴史的な事情あるいは判断から国連にPKOを参加させることができないとすれば、それは国連の事務総長をはじめ国際社会は、それを理解し、

了解するだろう』というものでございます。

『どこの加盟国も、PKOに参加することは義務づけられていません』ということも言われました。

また同時に、社会党が考えております法案の説明もさせていただきましたが、文民が貢献できる領域は多々ある、非常に大きくあります、ということも、明快なお答えをいただきました。

新しい世界の状況の下で安保理が決定した、いわゆるブルーヘルメットだけが、今もとめられているのではない。たとえば、貧困そして難民が平和な生活を脅かす一つの大きな要因になっております。そういったところで活躍するホワイトヘルメット。あるいは、今、環境の破壊も多く進んでいます。そういった環境保全のために活躍するグリーンヘルメット。そういった社会経済委員会で決定される平和維持活動もこれからは大変に大きくなるだろうということでございます。

こういった領域こそ、日本がもっとも実力を発揮できる領域であり、貢献できる領域なのではないか、というお答えでございます。

参議院PKO特別委員会二日目(12・6)

午後一時から矢田部 理氏(社会)が質問に立った。

「昨日、工藤法政局長官は、山賊、匪賊なら日本の指揮官の命令で発砲してよい、と言った。匪賊は日中戦争中に人民解放軍を指した言葉である。正規軍は撃たない、匪賊は撃ってもよいのであれば、中立の趣旨に反する。山賊、匪賊を撃ってよい、というのは差別、人権侵害以外のなにものでもない」と法政局長官を追求。法政局長官はただちに昨日の発言は不用意だったとして「山賊、匪賊」を「私的集団」と修正した。

続いて田英夫氏（社会）はアジア諸国でのこのPKO法案に対する受けとめ方について質問した。

私は以下のように答弁した。

「まず、中国の問題からご報告したいと思いますが、私は教科書問題が起りました時、「侵略」か「侵攻」かという時に、ちょうど北京で、その当時は記者として取材にあたっておりました。中国の方は当時大変寡黙で、ほとんどマイクを差し出しても答えていただけなかったんですが、この問題だけに關しては、「父は日本軍に殺された」とか「私の家も焼かれました」とか「南京から逃れてくる間に途中で大勢の人が死にました」と、畑で働いているおじいさんとか、孫の守りをしているおばあさん、通行人、そして若者までが、「実は私の祖父母から聞いたのですが」、というようなことで口々に訴えました。私は戦場になった

国というのは、過去も今も侵略の歴史が記憶だけではなくしみついているのだということを改めてその時に認識いたしました。私たちが今、平和のための貢献を考えます時に、一番アジアで念頭におかなければいけないのは、アジアの国々の指導者ではなく、こういった大勢の大衆だと思っています。

次にフィリピンのレイテ島でございます。激戦地になったところです。四年前になりますが、意識調査をいたしました。その時に「日本の印象」という項目を設けました。そこでももちろん「経済大国」ですとか「技術」といったようなものもございました。しかし同時に、そこに述べられていたのは「侵略」という言葉でもあり、この時も大変驚きました。そしてつい最近になりますけれども、この時も大変驚きます。これはひとつは香港の新聞です。「SOUTH CHINA MORNING POST」という新聞ですけれども、この新聞に書いてあることが、やはりこういうふうには日本が見られているということの一つの証しだと存じます。『六十年前に日本がアジア／太平洋を侵略した目的は、アジア／太平洋の資源を確保することにあった。今日、日本は「平和的な」経済侵略によってこの目的を達成することができた。よって、現在、日本の軍事化の目的は、その経済的な関心、そして投資をいかに守るかにある』。



これは新聞の記事の内容です。「私たちの土地が日本の占領下におかれた間の親たちの苦しみを、そして日本の侵略の残酷な歴史をくり返さないためにも、私たち、アジアの若者は日本の軍国主義を許すわけにはいかない。したがって、去年のように、PKO法案を倒そうとしている日本人たちを支援していく」というようなことが書いてございます。こちらは私が言っているのではなくて、新聞の記事がこういうような報道をしているということです。短くいたしますが、これは韓国の新聞、十一月十八日のものでございますが、京卿新聞と言うのでしょうか。「PKO法案は、要するに日本の正規の軍隊である自衛隊を海外に派遣することができるようにした法案だ」というふうに報じております。このようにアジアの危惧というのは、いろいろな形で今、大衆の中にやはり根づいているというふうには思っています」

アイルランド、フィジー、フィンランドなどの中小国はPKOに参加して国の威信をあげたということだ。だが日本はこうした国々と違う、大規模な軍事的侵略の歴史を持っている。私たちは国際貢献に反対しているのではない。日本の国際的な地位から、日本が義務と責任を果たすのは当然である。日本のアジア諸国に対する戦争の歴史を考えると、どんなに小規模でも武装して国外に出るべきではな

い。武器を携帯しない事で平和への意志を示すべきである。  
・PS「PKO法案反対！」のシュプレヒコールが委員会室でも聞こえます。応援ありがとうございます。どれだけ勇気づけられるかわかりません。

※

十一月二十七日、女たちの緊急集会を終えて堂本さんのお部屋に寄りました。集会では、強行採決で寄り切られるだろうとの悲観ムードでしたが、私は厳しい表情で国会中継を見守る堂本さんに、「敗北宣言は出さない」と言いました。限られた時間にどれだけ声を大きくできるか、勝算はありませんでしたが、それぞれの必死な思いが、臨時国会での不成立を実現したと思います。

しかし、まだ廃案になったわけではありません。攻防戦は続くでしょう。不戦の論理を確立し、覚悟をもって実行すること、これが、日本の進路を正す方法、そして国会でたたかう仲間への何よりの応援ではないかと思っています。

新聞・テレビに出ない情報を堂本さんはFAX送信して下さいます。また国会での全討論をビデオ録画しておられます。討議資料として希望者はダビングできます。これらの活動でネコの手も借りたい状況です。応援を！

(堂本事務所・〇三三三五八一三一一一内五四二二)

(斎藤千代)

北から南から

◆「あこら大阪」発信

十月十七日（木）と十八日（金）にかかってきた私宛ての怪電話について聞いてください。これは私のこれからの生き方の問題でもあり、何のために『あこら』を読み、湾岸にかかわっているのかを考えた末、私なりに決心してこれを書きます。十月十九日（土）六時三十分から吹田市勤労者会館で斎藤千代さんを迎えてのスライド上映会。そのごく市民的な、しかし、今、とても大切な平和を考えるための会を阻止させる目的でかけてきた悪質な電話です。

\*

十月十七日（木）、午後二時すぎ女性の声で職場に電話がかかってきました。私は市役所の国民年金業務に携わっており、窓口受付と電話受付で市民の年金相談に対応するのが主な仕事内容です。ですから電話受付は、市民の顔が見えない分だけ気をつかって話の内容に応じ、相手を怒らせない努力をしながら対処する習慣がついているようです。この日、相手は、いきなり「国民年金課の吉田さんですね。あなたは何ですか、公務員でありながら！ 年金の仕事を一生懸命にやっておれば良いのです。政治的なことにかか

わって。吹田市に対し市民として年金の不払い運動をしますよ。先に吹田市長にも電話を入れましたから、今、あなたのことで部長会をやっているはずですよ。私は、七回もアメリカへ行ってきました。あなたは英字新聞を読んだことがありますか？ 海外の事情を知っていますか。日本はスパイ天国ですよ。関西人として言いたい。だいたい女が政治にかかわって何ができると思いますか。あなたには十九歳の子どもがいるのにいったい何年勤めているのですか。主人はいるのですか。私の子どもは良い大学を出て立派に育っていますよ。女の幸せは家庭にいて女性として平安に暮らすことです。あなたには油断があります。あなたの子どもさんが母親の職場の電話番号を教えるということは、いったいどんな教育を家庭でしているのですか」（私は仕事上のかかってきた電話は必ずメモする習慣がある）電話の向こうの女性は一方的に早口で話し続け、「わたしは太平洋戦争を大東亜戦争と言います。中国をシナと呼びます。戦争でほんとうのことを言ったら抹殺されますよ。生活もしていけなくなりますよ。ある女性がビルから事故死した事件、変死事件にからまれたのを、私は知っていますが、あなたのやっていることは危険が伴い、家族や職場に迷惑

をかけます。関わらないと決心しないと退職金も年金も入らなくなります。わたしは赤信号をし、警告します。朝日新聞記者が死にましたね」……また、こんなことも言った。

「平和グループと言いながら、あんなのをやっているのは同和と朝鮮人が後で操っているのです」。約三十分間、相手は自分の思うことを全部喋って一方的に電話を切った。

（私は同和地区で生まれ育ったけれど、高校生になって地区出身差別体験するまでは、部落差別は自分のこととしてとらえることができませんでした。昔の身分制度で今さら言うことではなく、個人として、人間として明るく、魅力的に生きることが大切なのだと考えていました。）この電話がかかっている時、部長からの呼び出しメモで部長室へ行きました。部長は読売新聞の切り抜きをみながら、「秘書課へ市民から抗議電話があった」と言われました。私は、スライド上映会の趣旨と説明をし、脅迫電話がかかったことを知らせました。部長は、「その女性は、ちょっとおかしいのと違うか？ まあ、頑張ってくなはれ」これが吹田市としての答弁でした。

この日の夕方、仕事の帰りに勤労者会館に寄って、私なりの事情を説明し、会館の様子を尋ねたところ、右翼らし

い男の電話があったので、館長が市に事情説明に行ったことや、当日の施設の管理を警察に連絡して頼んでおいたということでした。十月十八日、午後二時ちょうどに女性の声で職場へ電話がかかりました。「斎藤千代さんの使いの者ですが、明日の集会は、妨害があり出席できなくなりしたので会場をキャンセルしておいてくださいと頼まれました。私も尾行されています」と言って切れました。昨日の脅迫電話と同じ声だったようです。すぐへあこら事務局へ電話して斎藤千代さんから直接お電話いただくようお願いしました。三時すぎに斎藤さんのもの柔らかい、しかし毅然とした言葉で返事がありました。明日の新幹線の切符は買ってあります。こちらは予定変更はありませんが、もし貴女がたのほうで中止なさるのでしたら行かないでおきます。私はどんな妨害が起こっても覚悟はしています、と電話の向こうで微笑んでおられる様子でした。

この上映会は、去る七月、斎藤さんのスライドとビデオを見せていただく機会を得たのをきっかけに「湾岸戦争をきっかけに……行動する会」の呼びかけと、へあこらや、地域の人の支えで、緊張しながら始まった会でしたが、当日は四十名もの参加者を得、斎藤さんのもの静かでありな

がら迫力のある解説と、参加者の中から「平和」がどんなに大切かという内容ある意見交換が話し合われ、すばらしい草の根市民集会になり、会は無事終わりました。脅迫電話はその後ありません。あの映像を見た人に平和への願いと構えが根づくことでしょう。

この日、岡崎市の会合を四時半に終え、その足で、吹田市に來られ、宿泊することなく十一時の夜行列車に乗り爽やかな表情で東京へ歸られた齋藤千代さんの人柄と根性を私たちは尊敬せずにはいられません。 (吉田ひさ子)

#### ◆「湾岸戦争をきっかけに……行動する会」の報告

十月の第七回例会は、四大新聞にも掲載していただいて、参加者四十数名と盛会のうちに終えることができました。一応の終結から約八か月。でも、あの湾岸戦争は決して人びとの心の中から消え去ってはいなかったと、うれしさ半分、再燃した日本政府への憤り半分で会を進めました。以下、当日の模様を簡単にご報告します。

「戦争報道にみる真実とは」のタイトルで、齋藤千代さんがイラクから持ち帰られた写真のスライドとビデオを、一人でも多くの人に観てもらって、マスコミ報道の真実性や

政治的意図について考えてみようというのが、今回の催しの趣旨でした。にもかかわらず、どこをどう取り違えたのか「イラクに加担すると生死は保証しない」というような意味の脅迫電話が、吉田さん宅と読売新聞に何度か入りました。結果的には何事もなく、会終了後は全く電話もかからなくなったわけですが、脅したり傷つけたりして他を黙らせようとする人たちの存在に、言いようのない腹立たしさを覚えました。ちなみに家族まで脅迫された吉田さんは、「屈しないで参加したことで、もう何があっても怖くない。人権解放のための運動に、命を賭けて取り組もうという思いが、今日やっと自分の中に根を下ろした気がする」とのこと。吉田さん宅を連絡先にしたこと、吉田さん一家には不安な数日を過ごさせてしまいましたが、今度のことは一人吉田さんのみにとどまらず、私たち全員が置かれた状況と言えるでしょう。これからも、勇気をもって「発言と行動する会」であらねばと思います。

さて話を元へ戻しますと、齋藤さんの会場到着が六時半過ぎになることもあって、前もって送っていただいた「グラーク調査団」(アメリカ)のビデオを先に上映しました。あと、参加者の一人で、十一月に同会場で『パレスチナの

子どもたちの写真展』を催されるといふ郡山さんから、その案内をいただいている所へ、タイミングよく斎藤さんが到着。すぐにスライドをセットしたのですが、映写機の調子が悪く、その間斎藤さんに話をお願いしました。

六時半ころから約一時間、斎藤さんたち一行が現地で撮影されたビデオを中心に、七月のものより更に生々しい映像が続きました。画面には斎藤さんの笑顔もありましたが、それらを解説する会場の斎藤さんには、最後まで笑み一つ見られませんでした。

あとの半時間ほどを、参加者と斎藤さんとの交流にあてました。「アメリカ留学中の孫に、正しい戦争なんてないのだから、まわりの噂にまどわされず平和を守ろうとする人たちと力を合わせるように話した」とおっしゃった女性の言葉に、私たちの思いは集約されます。男性中心の社会構造の下では、いつの時代も、どの国でも、戦争をしかけようとする勢力が存在するようです。でも一方で必ず平和を守り（創り）続けようとする勢力もまた確実に存在するのだという手応えを感じた三時間でした。斎藤さんはこのあとも、ビデオを携えて全国行脚の旅が続けられるそうです。私たちの会もまだ生まれればかりですが、学習会等

を重ねる中で「国際政治に発言し行動する」勢力を増やしていきたいと思います。

（文責：阿筈）

#### ◆脅迫という「卑怯」に怒り

私は楽天的で、のんきな人間ですが、何かの行動をする時は、それなりの覚悟はします。湾岸報道への規制、その規制が今も続いていることは明らかな「戦争準備」と感じ、覚悟を決めてスライドとビデオの「出前上映」を始めました。PKOの意味を考える何よりの端緒になる、と思ったからです。それだけに、私自身には激しい憤りを覚えました。れた方、その家族への脅迫には激しい憤りを覚えました。

「縮み志向」にはなるまいと思いつつも、吉田さんやそのご家族に危害が及ぶ可能性が多少でもあるのなら、人命尊重を第一にすべきではないかという思いもよぎりましたが、浪花女の熱気は、卑怯者を吹き飛ばしました。不戦への熱い思いをさらに共有できたすばらしい集会になったことを感謝しています。しかし類似の事件は今後とも起こるでしょう。脅迫はされませんでした、松山の女性センターでは「平和集会」は拒絶され、他に会場を移しました。これが日本の現状です。

（斎藤千代）

◆日本のPKO問題、何としても廃案にしたいと思っています。少し大掛かりな集会をと思いますが、〈あこら〉から全国の女たちへの呼びかけはいいでしょう。土井たか子さんの講演と全国から集まった女たちの戦争への道NO!!の意思表示などの内容で。日本が再び『恐ろしい国』にならないため努力したいと痛切に思いながら、ごろごろしています。△デルタ△、イラクへの募金八十万円を越しました。私も二度募金に立ちましたが、子連れの若い女性の積極的な反応は久しぶりでした。

(広島市 畠山裕子)

◆この度は、女性の地位向上に尽くされた方々に贈られる市川房枝基金の援助を受けられることに決まったこと、新聞で知りました。おめでとうございます。

先日国会内で行われた「PKO法案反対」の集会に斎藤さんがお越し下さったと伺いましたが、あの時は、代議士会を控え、最後までいられず、お目にかかれませんでした。自衛隊海外派兵法案、何としても廃案へという一念で頑張っておりますが、あと一步のところまで近づいたように思われます。まだまだ油断はできませんが、「廃案」まで共に頑張りましょう。(衆議院議員社会党 岡崎トミ子)

◆はじめて空をとんで飛行機がアルプスを越えると、小さな町が見えました。

空から見る町は青々とした田園に包まれて、美しくのどかそうに見えました。「空爆の時、爆弾を落とす人はどんな気持ちで落としたのでしょうか。こんなにきれいに見えるのに。人々が生活しているところなのに」と突然隣席の年配の御夫人が話しかけられました。街並みの美しさに見入っていた私はハッとしました。どうみても旅行を楽しんでいるおばさんとか見えないその方を見ながら、「おぬし、なかなかの人物やな」と心中ひそかに思う。

太平洋戦争当時、上空から見た日本の町々も同じように見えたことでしょう。私は何度か空襲に会い、グラマンの機銃掃射も受けました。一人原っぱを歩いていてねらい撃ちされた時は、機上の兵士の顔がはっきり見えたくらいです。それから、あの時彼等にとって私は、人間の少女であるという認識はなかったのではないかと思います。日本軍もまた同じように平和な町や美しい島を攻撃し、人々の命を奪い傷つけ、生活をこわしていたのです。夕食の席でまたその方と御一緒したので、昭和二十年日立で空襲に遇った話などをし、景色の美しさに感動するだけで、その町を見ながら空襲を思い爆弾を落とす兵士の心の中までは考えなかった自分のうかつさを恥ずかしく思い、いろいろ考えさせられましたと言いますと、その方は、私は空襲に遇わなかつ

たけれど、大学卒業直後の兄君が召集され戦死なされたという話をなさいました。

召集令状がきた時、父上も母上もとても心配して命を大切に無事帰還するようにと兄上におっしゃったのとことでしたが、兄上にはその親御さんの心が通じなかったのか、「死んで親孝行する」と言ってお出征されたとのこと。

「国のために勇敢に戦って名誉の戦死を遂げ、金鵄勲章をもらうことが親孝行と思っていたのでしょうか。当時はそのように教育していましたから。戦後、私は母はいつ眠るのかと思っていました。夜遅く、そして朝早く起きて、私は母の眠っている姿は見ませんでした。毎日兄の帰りを待っていたのです。戦死の公報が入った後も」と話されました。

\* \* \*

私は日曜ノド自慢を毎週見ている。家の者は物好きだと笑うが、午前中、一週間たった家事をし、午後にはまた翌週の仕事への心の準備にむかうための、それは短い時間だけれども私の心の休息の一刻でもあった。その番組の中で「岸壁の母」という歌がよく歌われた時期が二度ある。

最初は歌の出来た当時。まだ母親たちが息子を待ち続けていた頃であった。二度目は、その母の姿をみて育った娘たちが、かつての兄弟たちと同じ年頃の息子を持つ年齢になった頃である。あの岸壁にはいかなかったけれど、多くの

家庭でどれほど多くの母親が、見知らぬ土地に消えた息子を待ち続けたことか。現在ノド自慢で「岸壁の母」は歌われない。だが二度と再びそれが繰り返されないためには、「戦争を知らない世代」などと言って子育てをしてはいたいへんなことになる。「平和維持軍」の平和という言葉に決してまどわされてはいけない。かつて「東洋平和のために」と戦争遂行を教えられたことを思うと、平和のための戦いなどはないのだから。日本の港に入港している米国の大きな航空母艦をテレビで見ながら、背筋の凍る思いをしているのは、私だけではなからう。

\* \* \*

八月十五日、ハチ公前は暑かった。「ババタリアンヒステリー症候群」とプラカードを持った男たちの宣伝カーの音量のすさまじさ。若くはない男性の女性蔑視のささまな言葉。かつて「徴兵は命かけてもはばむべし」と朝日歌壇に力強い女性の歌が載ったが、徴兵はある日突然決まるわけではない。なしくずしにすべての事は進行する。何事も明日では遅いのだと痛切に思う。

\* \* \*

団体旅行などと億劫に思っていました、見知らぬ人たちと見知らぬ国を歩いてみて、教えられること考えさせられることの多い旅でした。

(東京都 坂口 郁)

◆「へあごろ」との出会いによって、私の今まで培ってきた価値観が大きく変化しようとしています。世界を戦争から救うために、皆さん頑張りましょう！

(京都市 徳光洋子)

◆二人の子どもと自主保育に参加して一年十か月。『自分を変える本』からの出会いです。(松山市 芥川光江)

◆市川房枝基金の件、おめでとうございます。新聞でも見ました。今月号(168号)は、胸が苦しくなるような内容でした。(千葉県 福島 泉)

◆この数日は、パール・ハーバー特集が続きましたが、今では湾岸戦争の「わ」の字も聞かれなくなりました。真心のこもった、信頼できる『へあごろ』が、ますます健在でありますように。(兵庫県 西田冬至子)

◆コペンハーゲン、ナイロビと貴重な旅を御一緒できたことを今も温かく思い出します。日頃は読むだけの会員でグメンナサイ。(愛知県 古野佐喜子)

◆日々の生活におわれて、何もお手伝いできずに心苦しく思っている毎日です。市川房枝基金、本当に良かったと思うとともに、もらって当然とも思います。これだけ長期に続いてきたことはどれだけ称賛してもよいことだと、スタッフの努力に頭が下がります。女の生き方にまよった時、出会ったのが「へあごろ」でした。以後、私の指針となりました。

した。「へあごろ」によって育ったと今も感謝でいっぱいです。(足立区 永井操子)

◆会員であり続けて下さる皆様、ありがとうございます！「ここが続くはずがないのに。天井にお金でも隠してるんじゃないの？」——出入りの運送屋さんの、半ば本気の冗談です。お陰様で、奇跡のように今年も年を越せました。出来、不出来の激しい『へあごろ』を、読み続けて支えて下さった皆様、折々にカンパをお恵み下さった皆様、無料の原稿をお送り下さった皆様、ほんとうにありがとうございます。

(カンパの方だけ特記するのもおかしいのですが、領収書代わりに……。敬称略で申し訳ございませんが)

安東純子 石原豊子 市川元江 稲垣菊子 稻生田妙子  
井田恵子 井上陽子 大橋倫子 岡部栄美香 北垣由美子  
久保田三千代 小林達子 佐々木春代 貞閑晴 佐藤陽子  
鈴木昌子 鈴木みつ子 下光軍二 田中寿美子 高畑義子  
田畑みどり 田村尅子 殿島美紀 中谷明子 中山紀代子  
中山正子 根井 春 野瀬英子 長谷川衛子 半田たつ子  
藤谷不二枝 古屋繁子 細田英理子 松平みえ 真柳みち子  
三浦文子 緑川あつ子 村田ときえ 森弘子 森崎民子  
安田郁代 柳原久美子 山崎久民 山本真理子 吉田千種 山口のり子 山口美代子



## 編集後記

◆・勝ち負けの論理ではなく、パワーを配分する別の方法があるはずです。どうして男（ばかりではないけれど）はそれを本気で考え、生み出そうとしないのでしょうか？

・戦争の悲惨さを、感性でまるごと拒む力だけでなく、知の交流と対話によって磨きあげる力を私たちは持っています。相手の意見に触発されて自分の考えが暖まり、言いたくなる。聴くことは考えることと同時進行しています。討論という時空間の楽しさ。この楽しさは、未来への力の源泉です。

・「ひとりでは何もできない」というのはウソじゃないかしら。日々のミニ・コミュニケーション。きょう一日、自分の感じ方に忠実に、これを少しでも伝えながら生きることに政治参加の原点。まず、ひとりで行動することは、最も手こわい未来変革の種を播くことだと思うのです。

「ひとりでは、できない」という幻に安住することは、「体制のまわし者」を自分の内に飼うことになりはしないかしら。

（しま・ようこ）

◆PKO法案が衆院特別委で強行採決された翌日の夕方、人と待ち合わせのため新宿駅にいた。出口付近でPKO反対ビラを配っていたが、ほとんどの人が無視して行ってしまう。

まったく関心がないのか、どうせ反対しても無駄としらけてしまっているのか、今この法案を許してしまうと、やがて徴兵制が敷かれ、あなたたちが、あなたたちの子どもが死んだり、人殺しをするようになるんですよ、それでもいいんですかと叫びたくなった。一人一人の力の結集が世を動かす、動かせるんだという実感を持ちたい。

（川崎みどり）

◆このごろ何か不自由だ、ものが自由に言えない、と思いませんか？ 湾岸戦争では私の払った税金も人殺しのために使われてしまった。そしてPKO法案。私はますますこの国が嫌いになっていく。何とかしなければという思いかられて、この集会の企画に加わったり、戦争に使った税金を返せという訴訟の原告団の一人になったりした。「イヤだ」という思いは多くの人がもっているのに、なぜ国としては違う方向に進んでしまうのか」「まだまだ行動が足り

ないのよね」そんなことを自分の言葉で語り始めたへ自立の心理学グループ」。だんだんおもしろくなってきた。

P. S. 安保と米国基地と天皇はいらない、です。

(与儀睦美)

◆公開講座、映画会と赤字を出しながらも、あこら心理学グループの催し事は終わった。そして『別冊あこら』になった。

二百円から四百円のおべんとうが、過不足なく、食中毒もなくすんだのが、裏方としては、なんともうれしいことでした。

(桑原ちあ子)

◆知らない、知らせないということは悪だ！ 湾岸戦争でつくづく思った。そして、忘れるということも。

(芦澤礼子)

◆なぜ愚かな戦争を繰り返すのか。——その恐ろしさ、愚かさを、それぞれの細胞にまでしみこませる論理の構築も不十分なのでしょう。

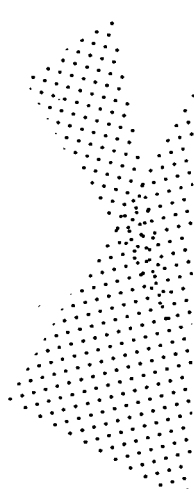
・一人ひとりが自立していない。これが国際貢献だと言われれば、右に左にたやすく流れてしまう私たち。経済的自

立、生活的自立は重要と感じても、思想の自立には至っていないのが残念です。討論という時空間の楽しさを享受しあうへ自立の心理学」に参加しながら、考えを深めたいと思います。

・湾岸戦争の現場に立って受けた衝撃の一つは、イラクやクウェートが、まさに巨大な「兵器廃棄処理場」になっていた、という事実です。兵器をつくり続けるかぎり、世界はまた「兵器廃棄戦争」を必要とするでしょう。巨大権力に素手で立ち向かう民衆の一人として、「正義の論理」を看破する英知を身につけなければ、としみじみ思っています。

・まずは実践を。私はまた当分、湾岸のスライドとビデオをかついで、どこへでも「出前」します。——ことばのどこに人が反応するか、映像のどこを見つめるか、人と出会うことは、新しい何かを知ること、そして考えることでした。

(斎藤千代)



へあこらは、ギリシャ語でへひろばの意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうへひろば。さくのないへひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、資料誌『あこら』(年二回刊)を、また一九七七年からは『月刊あこら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地のへあこら拠点にもお出かけください。

●へあこらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いつさい無関係。会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あこら』および『特集あこら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(年額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あこら事務局(TEL 03-3354-3941)へ

あこら 169号 1991年12月10日 発行

●編集 あこら〈自立の心理学教室〉

●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 くあこら 企画会議 定価 680円(660円+税20円)

